

第74回“社会を明るくする運動”作文コンテスト入賞作文

法務大臣賞（最優秀賞）

（小学生の部）

東京 山川 輝士

笑顔あふれる社会のために

（中学生の部）

大分 吉田 さくら晴蘭

明るい光、社会の中で

優秀賞

全国連合小学校長会会長賞

広島 瀬沢 柚月

祭りで気付いた人のあたたかさ

熊本 園木 理仁

人を受け入れる社会へ

宮崎 松田 龍ノ助

声をかける勇気

全日本中学校長会会長賞

宮城 宮崎 遥斗

言葉の裏側

千葉 塚本 愛子

傍聴から考えた出所者の更生について

愛媛 稲垣 あゆみ

誰もが自分らしく

全国保護司連盟理事長賞

（小学生の部）

福島 熊田 龍汰

明るい社会へ

茨城 池田 彩希

マンダラートとドーナツ

石川 寺田 梨桜

明るい社会はふわふわ言葉から

（中学生の部）

島根 竹田 絢音

犯罪をなくすために私にできること

徳島 吉本 頼陸

じいちゃんの黄色の羽根

日本更生保護女性連盟理事長賞

（小学生の部）

栃木 小島 悠叶

裁判を見て考えたこと

広島 杉山 栞絆

あなたのすてき

山口 松前 愛梨
(中学生の部)

東京 長崎 大嘉
東京 丹羽 健
富山 坂本 桜香

明るい社会の一員になれるように

身近な人に声をかけること

「違い」をプラスに

「特別」ではない

日本BBS連盟会長賞

(小学生の部)

東京 高本 理冴
長野 山崎 義心
三重 栗田 美怜

(中学生の部)

札幌 近藤 舞桜
沖縄 崎原 未来

私と家族

心ってどこにある？伝える大切さ

みんなに安心できて温かい居場所を

小さな声かけ、大きなつながり

繋がり、理解し、支え合う

日本更生保護協会理事長賞

(小学生の部)

埼玉 對馬 優
岡山 龍 一樹
熊本 跡部 唯吹

(中学生の部)

神奈川 松尾 香音
神奈川 山西 佳苗
和歌山 杉原 逢未

明るい社会はだれもがたから物

声をかけてみよう

だれかのためにできることを

誰かのために変わったなら

先入観を取り除いて

社会を平等に



笑顔あふれる社会のために



東京都・港区立芝小学校・六年
山川 輝士

「大丈夫ですか。抱っこしましょうか。」
僕が止めてもあの時、母はお構いなしだった。

夏休みに入り、僕は風邪を引き、母と病院へ行った。待ち合い室はとても混んでいて、長い時間、診察に呼ばれなかった。そこに三人の子供を連れた母親がいて、その人の赤ちゃんが子供がすごく泣いていた。あやしても泣き止まず、「もう嫌だ。静かにして！」と怒った表情で母親がきつく言うと、その子たちはもっと泣いた。その時、僕の母はすぐに声を掛けた。僕は、知らない人に話し掛けるなんてお節介だと、母の行動を恥ずかしく思った。しかし、その子たちは泣き止み、イライラしていた母親は笑顔になった。初めて会った母に、育児が毎日大変なことを話し、安心した表情になっていた。その人たちが診察室に呼ばれ、母と二人になると、

「子供が幼い時は、よく泣くし大変なのよ。困っている人がいたら、その人の気持ちに寄り添って声を掛けるのよ。」

と当然のように母は言った。母の言葉と、あの母親の笑顔を思い返すと、母の行動を余計なお世話だと思った自分を逆に恥ずかしく思った。同時に、人の気持ちに寄り添うとは、どのようなことなのかと考えた。

その後、風邪が治り僕は、苦手な水泳の練習のためにプールへ行った。練習中、突然鼻血が出てしまい、すぐに手で押さえたが全く止まらなかった。周りの人に嫌がられないかという不安と、頑張っていたのに上手くいかないもどかしさで、どうしたら良いのかわからなかった。その時、

「大丈夫ですか。ティッシュ、使ってください。こうすると鼻血が止まりやすいですよ。」

と、何人かの人が心配そうに僕に声を掛けてくれた。混乱しかけた僕の心は、優しい言葉で救われ、自然と笑顔になった。振り返ると、病院で子供が泣き止まず苛立った母親と、鼻血が止まらずあせった僕の気持ちは似ていると思う。どうして良いかわからず、本当は誰かに助けてもらいたかった。「大丈夫ですか。」という相手を気づかう言葉で笑顔になれた。相手の気持ちになって話しかける思いやりの言葉は、太陽のように心を温かくしてくれる。その人の辛さをわかろうとすることが、寄り添うことかなと僕は感じた。

夏休みの後半、久し振りに祖父母に会いに行った。元気だった祖父は、今は高齢で寝たきりの状態だ。色々な話をする中で、祖父が四十年も保護司をしていたことを初めて聞いた。罪を犯してしまった人の多くは、とても寂しく孤独で辛い思いが原因であったり、一人で誰にも相談できず、どうして良いかわからず悩んでいることを聞いた。祖父は保護司として、その人たちが二度と罪を犯さないように相談にのったり、前向きに社会で生きていかれるように、父親のような温かい気持ちで話を聞いてあげたそう。

祖父との会話中、祖父の体調をみるために訪問看護師さんが来た。看護師さんは熱や血圧を測ったり、オムツを交換していた。僕の母も訪問看護師をしている。母が働いているところを実際に見たことがないので、このように人のために頑張っているのかと知り驚いた。その時、祖母が急に出掛けると言った。こんな大切な時に出掛けるなんてと、僕は思った。看護師さんに優しく声を掛けてもらい、祖父は安心した表情だった。看護師さんが帰る頃、

「ごめんなさいね。お年寄りの方たちが心配で、様子を見に行ってきたのよ。」

と、汗だくで祖母が帰ってきた。民生委員をしている祖母は、一人暮らしの高齢者がこの夏の暑さで体調が悪くなっていないか、見守りに行っているそう。人のために行動する祖母の姿を見て、僕は一瞬でも、出掛けると言った祖母に苛立ったことを反省した。そして、僕には今、何ができるのかと、自分に問いかけた。

今、自分が楽しく幸せでも、もし目の前の誰かが困っていたり、悲しんでいたら、それは明るい社会ではない。ニュースで流れる虐待やいじめ、

詐欺や窃盗など耳をふさぎたくなる。しかし、被害にあった人がとても辛い思いをし、罪を犯した人も又、深い悩みや孤独を抱えていることに目をそむけてはいけない。困難にぶつかり、怒りや悲しみに襲われても、誰か一人でも自分をわかってくれる人がいたら、心の闇は取れると思う。祖父母や母、僕に優しく声を掛けてくれた人たちから、人を大切に思う気持ちを感じた。その優しい気持ちが、相手や周りの人の心を明るく安心させてくれる。僕はまだ、医療現場や犯罪者の更生に直接活動はできないが、自分のできることから始めたい。家族や友人、僕の周りにいる人に優しい言葉を掛けたい。「大丈夫ですか。」とお互いに温かい言葉を掛け、笑顔あふれる明るい社会を目指したい。



法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催

第74回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

明るい光、社会の中で

大分県・別府市立別府西中学校・三年

吉田 さくら晴蘭

私がオーストラリアにいた時、近所に、動物保護をしながら、貧困に苦しむ子供達に、食事や寝場所を提供している男性が住んでいた。母からは、あまりその家には近づかないように言われていたが、クラスメイトのA君が、その男性の家に出入りしているという噂を聞き、まだ十歳だった私は、なんの躊躇もなく、その家を訪ねてみた。A君は、スーパーでの万引きの常習者で、先生によく呼び出しを受けていたが、クラスのみんなに優しく、本当に穏やかな男の子だった。ユーカリの木が生い茂った入り口から、庭に入っていくと、いくつかある檻の中に、何匹かの動物が、静かに私の方を見ていた。庭の外に出されたガーデンテーブルのバスケットに入っているリンゴを、A君が私に向かって投げて言った。”Are you at a loss too? (君も途方に暮れたのか?)”

A君に話を聞くと、そこに住むオーナーの男性は、元受刑者で、幼い頃から弟を食べさせるために、スーパーマーケットでの万引きを繰り返したそう。服役を終えた今では、貧困で苦しむ子供を救うために、日本でいう子ども食堂のように、無償で食事を提供しているという。貧困、虐待、DV、アルコール依存、薬物乱用、様々な問題を抱えた家庭環境の中で行き場を無くした子供達を、少しでも助けたいと自宅を開放していた。檻に入っているのは、事故や虐待で怪我をした動物たちで、回復するまで保護していた。A君は、私とリンゴを食べながら、

「食べるものがなくお腹が空いて途方に暮れた時は、時々ここへ来て食事をする。そうすれば、食べ物を盗まないで済むんだ。」

と言って笑った。私は、それを聞いて、はっとした。A君は、本当に食べ

るのに困って、盗みを繰り返していたのだ。毎日、食べ物さえも買えない。だから盗むしかない。いつも人に優しく真っ直ぐなA君が、盗みを繰り返すのは、生きるための彼なりの手段だったのかもしれない。

日本でもオーストラリアでも、本当に生活に困って犯罪を犯す人も少なくない。貧困と犯罪、貧困と非行の関係は非常に強いと思う。日本でも、ある少年院による統計によると、三人に一人が貧困世帯で育っており、貧困が様々な条件を誘発し、非行に至ったケースは数多くあるそうだ。貧困、虐待、DV、アルコール依存、薬物乱用、様々な問題を抱えた家庭環境の中で真っ直ぐに明るく生きていくのは、本当に難しい。先進国である日本でも貧困問題の実態が問題視されている今、真っ暗な暗闇の中で一人、先の見えない未来に絶望している子供は少なくないと思う。

元受刑者である、オーナーにとっても、誰かに必要とされていると実感できるその場所は彼の生き甲斐となっていた。自分がここで、子供の面倒を見なければ、子供達が途方にくれる。自分と同じように犯罪を犯してしまう。そう思うことで、毎日、自分も真っ直ぐに生きられる。怪我した動物たちを保護し助けることで、自分が誰かに必要とされていると感じられていたのかもしれない。専門家によると、犯罪心理に深く関係しているのが、自己否定感であるという。生きていても仕方がない。自分なんて、どうでもいいという気持ちが、心の大半を占めてしまうと自暴自棄になり、自分を抑制する必要がなくなってしまう。犯罪の再犯防止において重要なのは、自己肯定感及び自己有用感の形成だという。自分の価値や存在意義を肯定できる「自己肯定感」と、誰かの役に立っている、貢献している、自分が有用だと思える「自己有用感」を、オーナーは、あの場所から得ていたのかもしれない。

犯罪は悪いことである。極めて悪質で卑劣な犯罪もある。しかし、その裏には、さまざまな理由があると思う。一度犯罪を犯してしまった人に対して、ただ、「罪を犯すべきではない、それは間違っている」と周りが諭すだけではなく、なぜ犯罪を犯してしまったのか、周りが理解し、わかってあげることが再犯防止につながると思う。

私が十歳の時に訪れたあの場所には、同じ罪を繰り返さないように支え合い、わかり合い、助け合っている明るい光、社会が確かにあったと思う。いつも優しくかった十歳のA君が、どんな気持ちで盗みを繰り返していたの

か考えると、居た堪れない気持ちになる。遠く離れたオーストラリアで、
彼が明るい光に包まれた毎日を送っていて欲しいと心から願う。



祭りで気付いた人のあたたかさ

広島県・安芸高田市立愛郷小学校・六年
瀬沢 柚月

私は、小学校三年生の頃から、バスケットボールを習っています。日々の練習で、コーチから、「声出しやあいさつは、プレーにつながる大切なことだ」と教わっています。だから、私はいつも、意識的にあいさつをするようにしています。

七月の下旬に、私の住む吉田町のビッグイベントである「一心祭り」がありました。毛利元就の「三矢の訓」をテーマにした武者絵巻が有名な祭りです。去年も私は祭りに参加し、家族と一緒に出店を回りました。しかし今年は、私と弟は、それぞれが友達と祭りに行くことになりました。なぜなら、今年、私の両親は、祭りの手伝いや出演があるために、同じ会場にいても一緒に回ることができなかったのです。私は、弟のことを気にかけてながら、友達と過ごすことになりました。出発前に、お金の管理や危険なことに巻き込まれないように注意することなどについて、弟にしっかりと確認しました。それでも、「本当に子どもだけで祭りに行って大丈夫なのかな」と不安な気持ちになり、ドキドキしました。

いよいよ会場に到着しました。私たち姉弟の、子どもだけでの行動開始です。出発前は心配な気持ちでしたが、回り始めるととても楽しく、祭りを思いっきり満喫していました。あれほど不安な気持ちだった私が、安心して祭りを楽しむことができたのは、出店を見ている私達に、バスケットボールのコーチやチームメイト、同級生のお父さんやお母さんが、

「楽しんでる？」

「何食べた？」

「おさいふをかばんに入れたら、ちゃんとチャックを閉めるんよ。」

「何時頃に帰るん？」

「柚月ちゃんのお父さん、あっちで武者の格好で準備しとったよ。」

など、たくさん声をかけてくれたからです。知っている人の姿が見えたり、声を聞いたりしながら過ごせたので、不安な気持ちが消えて、楽しめたのだと思います。

祭りが終わり、家に帰ると、子どもだけで過ごした時間の出来事を両親に話しました。すると、母が、

「お母さんは、柚月が出店でりんごあめをおいしそうに食べとったこととか、弟の面倒をよくみてあげとったことを、地域の人から教えてもらったよ。」

と、話してくれました。祭りが始まってからは、私は両親と離れて過ごしていましたが、両親は、私達の行動を把握していました。それを聞いて、私はとても驚きました。

祭りでの出来事から、私は、地域の人にちゃんと見てもらえているのだなと気付きました。そして、地域の人から見守られているからこそ、安心して生活することができているのだと思いました。このことに気付いた時、私は温かい気持ちになり、嬉しくなりました。

世の中には、さびしい気持ちや悩みを抱えている人がいます。人として何がいちばん辛いのかを考えた時、私は、誰からも関心をもってもらえず、「自分は独りだ」と感じることはないかと思いました。私にできることは少ないかもしれないけれど、「あなたは独りじゃない」ということを、あいさつや声かけを通して伝えることはできると思います。地域の人から私がしてもらったように、私も周りの人に関心をもち、気持ちを察することができるようになりたいです。そして、身近に困っている人や、さびしそうにしている人、不安そうにしている人がいたら、「大丈夫？」「元気？」と声をかけ、少しでも相手の心を救うことができるような存在になりたいと思います。私の通う小学校や暮らす町が、優しさに包まれて、誰もが安心して過ごせるよう、まず私にできることから行動していきたいと思います。



人を受け入れる社会へ

熊本県・菊池市立七城小学校・六年
園木 理仁

ある朝、いつも一緒に通う友だちが「学校に行きたくない」と言って集合場所に来ませんでした。僕はその子が嫌がっていることに気づかず、時々いたずらをしていました。楽しんでいたのは僕だけで、嫌がっていたその子が僕のせいで毎日学校に行きたくないと言ったことを知ったのは、少し後でした。そのことを知った母は、僕と一緒にすぐに謝りに行ってくれました。僕もすごく反省してその子に謝りました。幸い、その子の母親は僕のことを許してくれました。今では、仲良く一緒に学校に通っています。

この社会を明るくする運動について家族と食事をしながら話をしました。その話の中で僕の住む熊本には、日本で一番長く服役した人がいることを父が教えてくれました。僕はなぜそんなに長く服役しなければならなかったのだろうと興味がわき、調べてみました。その人が犯した罪は殺人でした。お金欲しさに強盗を働き、僕の弟と同じ四歳の子を持つ母親をその子の目の前で殺してしまったのです。僕は、こんなにひどいことをしたのだから長く服役するのは当然だと思いました。しかしその人が日本で最も長い間服役した理由は、犯した罪の重さからだけではありませんでした。

無期懲役など刑期の長い人も、刑務所でしっかりと反省し、模範囚となれば仮釈放という形で社会に戻ることができるのだそうです。しかし、いくら反省しても、身元引受人がいなければ、仮釈放は認められません。つまり「帰る場所」がなければ社会復帰は認められないのです。この日本一長く服役した人にも身元引受人がいませんでした。そのことが原因で五回仮釈放の申請をしたにも関わらず、認められませんでした。受け入れてく

れる誰かがいたら、この人にも違う人生があったのではないのでしょうか。大きな過ちだけど、立ち直るチャンスがあってもよかったかもしれません。

僕には一緒に謝ってくれる母がいました。許してくれた友だちがいました。そして何より、僕を受け入れてくれるクラスの仲間がいます。だから僕は失敗しても立ち直ることができるし、安心して生活することができます。

社会を明るくすることも同じではないでしょうか。僕が温かく見守ってもらったように罪を犯し、悔い改めた人たちが、あらたな気持ちで社会に戻った時、安心して立ち直るためには、その人たちを受け入れる優しい社会が必要だと思います。僕たちは差別や偏見をなくし、社会復帰を目指す人に寄り添うことで、だれもが笑顔で暮らせる社会を実現できると思います。まずは僕も身近な人たちを尊重しながら周囲を明るくしていきたいと思っています。



法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催
第74回“社会を明るくする運動”作文コンテスト



声をかける勇気



宮崎県・延岡市立西小学校・六年

松田 龍ノ助

「おたがいの心を知ることかな。」
と言いながらお母さんは、洗たく物を干しました。
小学校で「社会を明るくする運動」の作文が宿題で出ました。お母さんに、
「犯罪非行のない地域社会づくりって何をすればいいのかな。」
と聞くと、お母さんがぼくだったらどうするのか聞いてきたので、ぼくは自信満々に
「世界中の人達が警察官になればいい。」
と答えました。全員が規律正しく行動すれば犯罪が起こらないと思ったからです。するとお母さんは、笑いながら
「とてもいい考えだね、お母さんは相手の心を知ることができれば優しい社会になると思うな。」
と言いました。相手がどういう人でどんな考えを持っているのかを知ることができればみんながおたがいを思いやっていけると思うとのことでした。お母さんの話を聞いて、ぼくは思い出したことがありました。
八月二十九日、夏休み中にぼくの住んでいる宮崎県に台風が来ました。竜巻が起こり、たくさんの被害が出ました。ぼくの家には被害はありませんでしたが、台風が過ぎた後には道路にたくさんの葉っぱが落ちていました。ぼくにも何かできることがしたいと思い、お母さんと一緒に道路のそうじをしました。そうじをしていると、近所の人に来て、手伝ってくれました。葉っぱの落ちているはん囲が広く、とても大変でした。一緒にそうじをしている近所の人にジュースをわたしながらお母さんが

「暑い中手伝ってもらってすみません。」

と言うと、近所の人は、にっこり笑顔で

「みんなでそうじをした方が早く終わるからね。」

と言ってくれました。それからまた、そうじを始めました。おとなりさんの家の前、そのまたおとなりさんの家の前の道路もほうきではきました。そうじが終わるころ、おとなりさんが車で家に帰ってきました。おとなりさんとは、あまり話をしたことが無かったので何て言われるのだろうとドキドキしました。おとなりさんは車から降りるとぼく達を見て

「ありがとう、ありがとう。」

と目を細めてにこにこしながら言ってくれました。ぼくは心が温かくなりました。「ありがとう」は人を優しくする魔法みたいな言葉だなと思いました。おとなりさんと話をする前は、こんなにおだやかでにこにここと笑う人だとは知りませんでした。そうじを通して話をするのができて良かったです。

相手のことを知らないことは、とてもこわいことだと思いました。勝手なイメージでその人がどんな人なのか決めつけてしまうからです。話をしておたがいがあることを思って、どんな気持ちでいるのかを知ることができればもっと仲良くできると思います。

犯罪、非行を完全に無くすことはほぼ不可能ですが犯罪、非行が起こる前に防ぐことはできると思います。なやんでいる人がいたら相談にのり、その人の心によりそえればさみしい気持ちは無くなって心も元気になると思います。明日学校に行ったら、さっそくいつもはあまりしゃべらない友達に声をかけようと思います。



言葉の裏側



宮城県・岩沼市立岩沼西中学校・二年
宮崎 遥斗

「暴言を吐くことはいけないことだ。」

これが今までの僕の暴言というものに対する考えです。しかし、あるラジオ放送の番組の話を聞いて考え方が変わりました。それは、作家の岸田奈美さんのインタビュー番組でした。

「大事なのは『なにを』言っているかではなく『なんで』言っているのか」これは、奈美さんのお母さんが言っていた言葉だそうです。暴言のような攻撃的な言葉にも、その裏には苦しかったり辛かったりさまざまな思いが隠されているかもしれないということです。

以前、障害を持つ奈美さんの弟さんの写真に、とある意見がつけました。それには「ガイジ（障害児）は生きる価値なし、死ね」とあったそうです。これに対して、奈美さんは「通報しますよ」などと対応しました。すると、それを送ったのが子供だったらしく、その後その子の母親から連絡が来て、そこにはその子のことについて書かれていました。その子が発達障害であること。「障害児死ね」というのは学校で本人がずっと言われていた言葉であるということ。ネットで障害のある人に「死ね」と言うことで「自分が悪い人じゃなくて、障害を持って生まれてきたことが悪いんだ」としようにしていたこと。奈美さんは衝撃を受けました。「死ね」はとても強い攻撃的な言葉だけど、その裏にある、辛くて、苦しくて、どうしようもない自分の障害に対する嫌悪が、奈美さんに届いたその意見には詰まっていたのです。

また、話にも出てきたネット、いわゆるSNSにも同じようなことが言えると思います。SNSの中には匿名で利用できるものが多くあります。

僕もそれらを利用することがあるため分かりますが、個人情報保護などのメリットがある一方、匿名なのをいいことに誹謗中傷をする人も時折見られデメリットも多く感じます。

「匿名」は、利用者を完全な自由に導くものなのでしょうか。違います。SNSだからといって何を言ってもいい、何をしてもいいということには、絶対になりません。匿名だからと羽目を外しモラルに反するような言動をすることは決してあってはなりません。それによって、傷ついたり苦しんだりする人も多くいるでしょう。しかし、奈美さんの話のように、その表側の攻撃的な面の裏に苦しく辛い気持ちも隠れているかもしれません。だから耐えろということではなく、このことを知っておくことが大切だと思います。

攻撃的な言葉だけではなく、言葉自体には様々な感情がこめられています。話し手、書き手が、何を思い、何を感じ、その言葉を発しているのか。これを感じとることができれば相手を理解することもできるでしょう。

僕は、悪いことをしたら責められるばかりのこの社会は間違っているのではないかと考えました。その背景には、そうさせた環境があるかもしれないからです。むやみに人を責めるだけの社会ではなく、「なんで?」「どうして?」と少しでも寄り添える社会が今、必要になっていると思います。



傍聴から考えた出所者の更生について



千葉県・浦安市立浦安中学校・一年
塚本 愛子

昨年の冬、私は東京地方裁判所に行き、裁判の傍聴をしました。民事事件、刑事事件ともに数件ずつ傍聴し、なかでも最も強く印象に残った事件は「窃盗事件」でした。

被告人席に座っていたのは、まだ二十代前半と思われる若い男性でした。彼は、転売目的のために量販店で大量の衣類を盗んでいるところを現行犯逮捕され、勾留されていました。傍聴していくにつれ、犯罪に至る経緯が見えてきました。被告人には病弱な妻と未就園の小さな子どもが二人おり、コロナなどの社会情勢もあり、やむを得ず生活のために犯罪に手を染めてしまったのです。この裁判が行われている、今この瞬間も、被告人である父親の帰りを小さな子どもが首を長くして待っているのか、と思うと、私は胸が苦しくなりました。生活のためとは言え、盗みでお金を得ること以外に、もっと他に方法を探らなかったのか、とも強く思いました。そして被告人を見ながら同じ「父親」という存在である私の父のことを思い出しました。父が毎日真面目に仕事に向かう姿を……。今までそれが当たり前だと、いえ、当たり前と思うこともないほどに意識していなかったと反省しました。父への感謝の気持ちが沸き起こってくると同時に、食べることに困っているかもしれない被告人の家族を想い、複雑な気持ちで裁判所を後にしました。

私は法務省赤れんが棟の「法務史料展示室」にも行きました。数々の貴重な法務資料がありましたが、江戸時代の「入墨刑」の資料に大変衝撃を受けました。罪人に、一生消えない入れ墨を施すことで、周囲から生涯「前科者」として認識されるのです。江戸時代には見せしめとして犯罪抑止力

の効果があったのかもしれませんが。しかしこれでは、心を入れ替えて更生しようとしても周囲の目が厳しくやる気をそがれてしまいます。

前述の事件の被告人は、裁判の後半にこのように言いました。「これからは、家族、親戚、知人の力を借りて真面目に働く」と。この被告人は、助けあう人間関係の中にいるように見えました。私はこの「温かい人間関係」に立ち直りの鍵があると考えました。残念ながら罪を犯してしまった人でも、周囲の人たちとの「温かい人間関係」があれば、心身共に休み、反省し、力をつけ、立ち直る可能性があります。それでは何らかの理由で「温かい人間関係」が望めない人たちはどうしたらよいのか、私は調べてみました。すると、今の日本にはそういった方たちにも手厚い支援があることを知りました。まずは「保護司」という、出所者の立ち直りを一番近くで見守る人々の存在があります。他にも「自立更生促進センター」「就業支援センター」など、様々な施設・制度があることも学びました。私が驚いたのは、保護司の活動は、民間のボランティアであり「無給」ということです。報酬を求めず、更生を支援するその熱い思いがまさに「温かい人間関係」です。

江戸時代のように「入墨刑」をして社会から前科者を切り離してしまうことは簡単ですが、それでは根本的な解決になっていません。社会全体で問題を捉え、支援していくことが「犯罪や非行のない明るい社会づくり」につながると思います。

また、犯罪や非行が起こる前に社会で何ができるかと考えました。私は「教育」だと思います。宮口幸治『ケーキの切れない非行少年たち』によると、多くの非行少年は簡単な漢字の読み書き、算数の理解が不十分な傾向にあるそうです。私はその本を読み、学校全体で読み書き計算の反復練習をすることが、その地域の犯罪・非行を減らせると考えました。特に算数では、「AだからB」「BだからC」と論理立てて思考する練習をします。この思考法が、「これをすれば逮捕される」「逮捕されれば家族が悲しむ」と道筋を立てて思考することができ、犯罪・非行への歯止めが効くと思います。私は「温かい人間関係」と「教育」の二本柱で明るい社会を作ることができると信じています。

裁判の傍聴から約半年が経過し、おそらく前述の被告人は家族の元に戻っていると思います。国やボランティアの皆さんの支援を受け、現在は笑

顔で暮らしていることを願っています。



誰もが自分らしく

愛媛県・南宇和郡愛南町立城辺中学校・二年
稲垣 あゆみ

『私達の「待つ時間」はきっと誰かの「変わっていく時間」』私はこの言葉を「社会を明るくする運動」と書いてあるポスターの中から見付けた。初めは、「なんのこと？」「どういう意味？」という疑問であふれた。しかし、講師の方の話を聞くうちに、その言葉の意味がしっかりと分かった。

七月初旬、私は「社会を明るくする運動」の講演会に参加した。講演の前に配られたファイルの中に「再犯」「更生保護」という言葉が多くあり、講演会の印象が大きく変わった。私は初め、「社会を明るく」＝「みんなを笑顔に」というイメージを持っていたのだ。講演会が始まり、講師の方からグラフが提示された。それは、国内で検挙された人のうち、再犯者の割合と刑務所を出所後五年以内に再び罪を犯して刑務所に戻る人の割合だった。結果は約二人に一人や三人に一人。私はこの割合の高さに衝撃を受けた。「あまりにも多すぎる。」確かに考えてみれば、テレビや新聞で見ると毎日のように事件や犯罪のニュースが流れている。しかも、「〇〇容疑者は一年前に刑務所を出所したばかりでした。」というアナウンサーの言葉を聞いたこともある。私は、「なぜ自ら悪い行いをするのか。罪を犯した事実は変えられない。過去に戻ってやり直すことはできないのに。」と不思議に思っていた。

私は正直、事件や犯罪のニュースについて少し、他人事のように感じていた。そこで、「もし、自分の大切な人が誰かに命を奪われてしまったら」という仮定で考えてみた。被害者やその家族には「大丈夫？」「何かできることはない？」という同情的な考えを持つ。しかし、加害者には「何をしてくれたんだ！」「もう関わりたくなんかない。」という怒りや差別的な

感情を自然と持っていた。たとえ更生したと言われても、「本当に改心したのだろうか。」と無意識に疑い、今までのように普段通りに接することができるとは言い切れない。

そんなことを思っていたが、講演会で「犯罪を犯した人はやりたくてやっているんじゃない。」という話があったことを思い出した。犯罪を犯すことや再び罪を犯すことはもちろん悪いことだ。しかし、それはやった本人だけでなく、その人の事情や思いを理解しようとせず、無意識に差別をしている周りの人たちにも責任があるのではないだろうか。一度犯罪を犯した人が刑務所から出所したとしても、家庭環境に恵まれず帰る家もない。自分を信用してくれる人も頼れる人もいない。そして、社会からの偏見や冷たい視線を浴びる。そうすると本人が本当に更生しようと思っても、外的要因から再び罪を犯してしまうことになるのではないか。

もちろん、非行や犯罪のない社会をつくることは一番だ。しかし、今だに犯罪や非行があるのも事実である。では犯罪のない社会を作るためにはどうすればよいのだろうか。講演会で学んだ地域が行う活動とは、罪を犯した人の再出発を支える、五つの仕組みを整えることだそうだ。私の住む地域は保護司会や更生保護女性会などはあるのに対し、BBS会や、女性専用の更生保護施設はない。そこで少しでもそのような五つの仕組みが整うように活動していると聞いた。初めて聞く「保護司」などの言葉に、少し難しさを感じたが、より良い社会のためにボランティアとして活動している方たちの思いを知り、本当にすごいと思った。

さあ、次は私の番だ。私にできることは何だろう。それは、日頃から様々な視点で物事を見ることや犯罪者への差別意識をなくすことだと思う。他にも地域とのつながりを大切にしたり、挨拶をして心の距離を近づけたりすることも必要だ。まずは、ここから始めたい。

一人一人の考えを急に变えることは難しい。だからといって考えを変えなくていいというわけではない。私ひとりでは社会全体の意識を変えることはできない。しかし、更生しようとする人たちを、社会全体が温かさや思いやりを持って「待つ」ことで、その人が「変われる」人がもっとたくさんできるはずだ。私たち一人ひとりが変われば、「社会を明るくする輪」を少しずつ広げることができるのだ。

一人ひとりが周囲への思いやりの気持ちを持って今できる最善を尽く

すことが、非行や犯罪のない社会をつくる第一歩だ。それが私たちの誰もが自分らしく生きることのできる社会を実現することになるのだ。その気持ちを持って毎日を大切に過ごしていきたい。



法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催
第74回“社会を明るくする運動”作文コンテスト



明るい社会へ



福島県・天栄村立牧本小学校・六年
熊田 龍汰

ぼくは、今年の夏休みに一つの事件の裁判をぼうちょうしました。法廷に入るとテレビで見るような検察官や弁護士、裁判書記官がいました。しばらくすると、こしのまわりをなわでしばられ、手じょうをはめられている犯人が警察官に連れられて入ってきました。とても重苦しいふんいきでした。最後に裁判長が入って来ました。

検察官が起そ状を読み上げました。犯人は家でお酒を朝飲んで、どうしてもお金がほしくて、ビールを買いたくて、畑に止めてあった軽トラックから現金三万円と、カードを三枚ぬすんだそうです。犯人は

「間ちがいありません。」

と罪を認めました。

起そ状によると、この犯人は五十代の男の人で一度は結こんをしたけれど、りこんをして一人で生活保護を受けながらぬすみを何回もくりかえしていました。

今回が七回目だそうです。前の罪をつぐなって刑務所を出てきて、わずか一年でまた同じ罪を犯してしまったのです。

検察官の質問がはじまり、

「今日までにだれか面会にきましたか。」

「来ていません。」

「だれかから手紙はきましたか。」

「きていません。」

「だれかに手紙を出しましたか。」

「出していません。」

と、犯人は小さな声で答えていました。

ぼくは、犯人がかわいそうになりました。何回も罪を繰り返しているのは、きっとさみしいからなのではないでしょうか。りこんしてうまくいかない人生、頼れる人も頼ってくれる人もいない人生、自分がかまっても心配してくれる人もいない。どこかなげやりになっているのではないのでしょうか。

検察官が最後に、

「寄りそってくれる人がいないということは、再犯を繰り返すと思われることからひ告人をちょうえき二年に処するのが相当と考えます。」と、意見をのべました。

人は自分自身を守るために、相手のマイナス面を見つけて、自分に近づけないようにします。この人も、みんなからいやがられ、つき放されたことで、罪をくり返しているのだと思います。罪を犯したことは許されることではありません。しかし罪をつぐなった後も同じあやまちをくり返すのは、ぼくたちの責任ではないでしょうか。あやまちをくやんで反省している人達が生きていける社会をつくることがぼく達の明るい社会へつながるのだと、ぼくは思います。

遠ざけるのではなく、相手に近づき、たった一言、声をかけたり、よりそうことで、一人の人が救われる。こわれた人の心を治すのはやっぱり人なのだと思います。

ぼくは罪を犯してしまった人の心を今は治すことはできませんが、困っている友達や一人ぼっちでいる友達に、声をかけたり、やさしく寄りそい、少しでも社会を明るくするために、今自分ができることからはじめていきたいと、今回の裁判をぼうちょうして思いました。一人が一人に寄りそうことでみんながつながり、明るい社会へとつながっていくのではないかとぼくは思います。



マンダラートとドーナツ

茨城県・鹿嶋市立大同東小学校・六年

池田 彩希

私は今年の四月から登校班の班長を任されている。班長をしたかったわけではない。主に班長は、六年生の女の子が引き受けることが多いらしく、そんなの変だなと思いながらも、話し合いで私に決定した。班長の役割は、下級生のことを考え、お手本になることだと私は思っている。

夏休み前になると、絵の具に習字セット、リコーダーやけんばんハーモニカ、授業で作った作品など、汗をぬぐいながら重いランドセルの他に、手でたくさんの荷物を持ち帰らないといけない。荷物よりも気持ちや足取りが重い帰り道。夏休み前の最後の下校時、両手いっぱい荷物をかかえている男の子がいた。私の班の子だった。荷物を持ってあげるか迷っていた時に、授業で作った「マンダラート」を思い出した。卒業までに立派な六年生になれるように、何が必要なのかを話し合って作ったものだ。それを思い出したそのしゅん間、体が動いていた。目標に一步近づけた気がして、私は達成感でいっぱいになった。それだけでじゅうぶんだったのに、その後、男の子はおばあちゃんと一緒にお礼を言い自宅まで来てくれた。みょうにはずかしかったのは、改まった「ありがとう」の一言がうれしかったからだ。「情けは人のためならず」親切なことをすればめぐりめぐって自分のところにもどってくる。私に届いたのは、感謝の気持ちとドーナツだった。

非行や罪を犯してしまった人は、過ちをくり返さないためにも、なりたいて自分を考えることも大切なかもしれないと思った。行動のきっかけは自分のためであっても良い。ささいな行動がだれかのためになったり、自分の心を満たすことになるかもしれない。心が満たされると不思議と心に

よゆうができて、周りの変化に気付けるようになる。

私は地域の人に見守られていると感ずることがある。朝、集合場所まで歩いていると、あいさつの他に「今日は暑いね」や「背がのびたね」と声をかけてくれる。また、通学路に草がおいしげっていても、いつの間にか地域の人がきれいにしてくれている。そのおかげで、私はケガもなく元気に登下校ができています。

私は、班長と登下校をきっかけに助け合いの広がりを知ることができた。小さな出来事ばかりかもしれないけれど、それに気付いて心を豊かにできた気がする。非行や罪を犯してしまった人だって、こんなささいな出来事に囲まれているはず。

どんな人にだって温かい心はどこかに必ずある。ずっとすみっこの引き出しの中にあるかもしれないし、こたつの中にあるかもしれない。人間は見つけ出すのが下手なだけ。いくら時間がかかっても良い。一人が無理なら周りの人と一緒に探せば良い。そうやってみんなで見つけていけば、明るい社会に一步步近づけると私は思う。



法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催

第74回“社会を明るくする運動”作文コンテスト



明るい社会はふわふわ言葉から



石川県・白山市立北陽小学校・六年

寺田 梨桜

私の学校・クラスでは、「なくそうちくちく言葉、ふやそうふわふわ言葉」という生活目標があり、一か月がんばって取り組んでいました。

ふわふわ言葉とは、「ありがとう」や「楽しいね」や「手伝うよ」といった、言った人も言われた人も気持ちがふわふわして、うれしくなる言葉です。一方、ちくちく言葉とはふわふわ言葉と真逆で、「いっしょに遊んであげない」や「死ね」などの悪口や、「〇〇しろ」といった相手をきずつけてしまう言葉です。

今年の春に私のたんにんの先生が教えてくれたことがあります。それは、みんな人間には、心の中にコップがあって、そのコップの水が多いほど幸せになります。人に親切にしたり、よろこばせると水が増えていきます。逆に人に悪いことをしたり、いやなことをするとコップにあながあいて水がこぼれていきます。コップの水が少なくなると、幸せを感じれなくなります。そうすると、気持ちが満たされず、くりかえし悪いことをしてしまいます。このコップのあなをふさげるのは、周りにいる友達や家族だと教えてくれました。

先生がこのお話しをしてくれてから、クラスの全員がコップの水がいっぱいになるように過ごしています。他にも「あいさつ運動」というものも進んで取り組んでいます。「あいさつ運動」とは、生徒を中心として、しょうこう口前で登校してくる生徒にあいさつをするというものです。それと、一生生から六年生のクラスを回ってあいさつをする事もあります。このようなことをすることで、教室のふんいきが良くなり、最近はクラス内だけでなく、学校も明るくなってきました。

言葉は、人をうれしくすることもできるし、人をきずつけてしまうこと

もできるという力を持っています。軽い気持ちやノリで言ってしまうても、相手をきずつけてしまうことがあります。

私が低学年くらいのころに、いじめ、差別をされている子がいました。その子は、いじめている子に、こんなふうに言われていました。

「おまえのにおいくさい」

「おまえ弱すぎ、ざこじゃん」

といった悪口（ちくちく言葉）を言われていました。こんなことを言っても心の中のコップの水は、増えるどころか、あながあいて水が少なくなってしまう。そうすると、自分も幸せになれないし、相手も悲しい思いをしてしまうのです。

罪を犯してしまった人は、心の中のコップにあながあいている状態です。もしその人に、かげぐちを言ったり、いやな視線を送ったりするとどうなるでしょう。あながもっと広がったり、増えてしまいます。そうすると、これが原因でまた罪を犯してしまうかもしれません。そうなってしまった人を幸せにするには、周りの友達や家族があたたかい声かけ、つまりふわふわ言葉を言ってあげるのが必要だと思います。

自分の周りに罪を犯してしまった人がいると、とてもこわいし、話しかけづらいと思います。でも、その人は自分のしてしまったことに反省して、前向きになろうとしていたら、話しかけてあげることで、心の中のコップの水が増えるかもしれません。

最初の一言はとてもきんちょうするし、勇気がいることだと思います。でも、その一言をかけることで、自分も相手も心の中の水が増え、その積み重ねで明るい社会になっていくと思います。



犯罪をなくすために私にできること



島根県・浜田市立金城中学校・一年

竹田 絢音

「なぜ捕まると分かっている犯罪をするのだろう」

私はニュースで罪を犯して、警察に捕まった人を見るとこう思っていました。けれど、受刑者の思いを調べたり、人権集会で話を聞いたりしていくうちに私の考えは変わっていきました。

金城中学校では毎年六月に人権集会を行っています。今年のテーマは受刑者の社会復帰についてでした。この事前学習の時に「あさひ社会復帰促進センター」という施設があることを初めて知りました。この施設は罪を犯した人が入り、国と民間が一緒になって運営しています。施設内の設備などにも様々な工夫があり、受刑者が快適な空間で社会復帰の意欲を高めることができるようになっています。

受刑者の中には、過去につらい思いをしたり、虐待やいじめなどの苦しい経験をしたりした人が多くいるそうです。この事実を知り罪を犯してしまったことは悪いことですが、受刑者をただの悪い人とは思いませんでした。これをきっかけに受刑者について詳しく知ろうと思うようになりました。

人権集会では、具体的にどのようなことを行っているのだろうという思いで講師の方のお話を聞きました。

あさひ社会復帰促進センターでは、訓練生が出所したときに生活しやすいように、多くの工夫がされていることがわかりました。その中でも印象に残っていることは、TCプログラムと呼ばれる回復協同体です。このプログラムは、訓練生がグループに分かれて自分の経験や意見を言ったり、相手の意見を聞いて自分の考えを述べたりすることで、自分の居場所を見

つけることができるというものでした。TCを活用しているところは、日本でもここだけだということを知り、とても驚きました。数年間、訓練生が安心して過ごせる人間関係を築くことで、自信を取り戻したり社会に出た後も再犯防止につながったりするのだと思いました。

「なぜ捕まると分かっている犯罪をするのか」と思っていました、それぞれ複雑な過去があって、犯罪につながってしまうのだと考えるようになりました。過去のつらい経験が積み重なった結果、捕まるとわかっている犯罪に手を染めざるを得ない状況に追い込まれているのではないのでしょうか。そう考えると、罪を犯さないような環境づくりや関係づくりが大切になってきます。

犯罪をする人を減らすために私に何ができるか考えてみました。犯罪をした人の多くが、子どもの時に虐待やいじめなどの様々な理由で心に傷を負った人だそうです。私はいじめを受けたことはありませんが、もし、いじめを受けている人がいたら、その人の話を聞くようにしたいです。話を聞くことでその人の気持ちが少しでも明るくなって、笑顔になる……。そんな小さなことですが、犯罪を減らしていくことにつながると 생각합니다。私も困った事などがあつたら、一人で悩まずに誰かに相談したり、話を聞いてもらったりしたいです。自分が心を開くことで、相手にも安心して相談される自分でいたいと思います。

「罪を憎んで人を憎まず」という言葉があります。以前はこの言葉の意味がわからなかったけれど、人権集会を通して理解することができました。犯罪をしたことは悪いけれど、その人のすべてが「悪」ではありません。どんな人の言葉にも耳を傾け、思いに寄り添えるようになりたいと思います。



じいちゃんの黄色の羽根



徳島県・鳴門市第二中学校・二年
吉本 頼陸

僕のスケートボードバッグには、黄色い羽根のバッジがついています。祖父が亡くなった後家を整理しに行った時、最後に着ていただろうスーツの上着についていたのをもらって帰って来ました。見た目で、スケートボードバッグにつけたらカッコイイだろうなと思ってもらってききましたが、仕事でつけていたのなら何か意味があるのかなと思ったので、ひまな時に調べてみました。

黄色い羽根は「幸福（しあわせ）の黄色い羽根」と名付けられていて、犯罪のない幸福で明るい社会を願うシンボルとして使用されていて、主に保護司の人が着用しているそうです。

調べてみて、僕は納得しました。なぜなら僕の祖父は、退職してから保護司として再犯防止推進協議会の委員などをしていたからです。祖父の部屋には、犯罪を犯してしまった人が、また犯罪を犯してしまわないようにどうすればいいかというような本や書類がたくさんありました。

「頼陸君は、近くに人を殺したことがある人がおったらどう思う。」と聞かれたことがあります。僕は、

「どんな人か知らなかったらこわいけど、ほんまは優しい人って知ったり、友達だったら、人を殺したことがあってもこわあないと思う。」と答えました。その時、祖父がどんな仕事をしているのかを聞きました。そして、最後にこう言いました。

「ムシャクシャしてただけとか、誰でもよかったって犯罪犯す人もおるけどな、いろんな理由があってやってしまう人もおるんよ。まわりの人がうわさしたり、仕事する場所がなかったりしたら、また何かをしてしまうん

よ。仲間がおったり、仕事があったり、がんばろうと思えたり、楽しいことがあったら、悪いことしてやろうや思わんやろ。ほなけん、もしも頼陸君のまわりに、ほんな人がおることがあったらな、ニコニコ楽しくお話してあげて、味方になってあげてな。」

この時の話を思い出して僕は思いました。僕は、イヤなことがあったり、会いたくない人や、かかわりたくない人に、すぐに「死ね」と言ってしまう。弟とケンカしても、すぐに「死ね」と言ってしまう。でも、イヤなことがあっても、楽しいこともあるし、キライな人がいても、仲の良い好きな友達もいます。だから、「死ね」と言っても、本当に消えてほしいと思っても、殺さないのかもしれない。楽しいことがなかったり、友達がいなかったら、ムシクシクして、殺してしまうかもしれない。ニュースとかで、何であの人が、良い人やったのに、と言われていることがあります。色んな心のバランスが壊れると、ちょっとしたきっかけで、誰でも犯罪者になってしまうのではないかと思います。そして、罪をつぐなって、社会に戻ってきた時に、仕事をさせてもらえずお金がなかったり、みんながこわがって一人ぼっちだったら、また何か犯罪を犯してしまうんだらうなと思いました。

僕だって、友達だって、母も弟もいつ犯罪を犯してしまうかわかりません。僕の心のバランスが壊れてしまわないように支えてくれる友達や家族がいます。僕も、大事な人の心のバランスが壊れてしまわないように、支えられる人でありたいです。祖父の黄色い羽根は、これからも大切にします。



裁判を見て考えたこと

栃木県・足利市立筑波小学校・六年

小島 悠叶

夏休みに太田市の裁判所に行き、初めて実際の裁判をぼうちょうしました。以前、裁判のシーンがあるドラマを見て興味を持っていたので、母さんが連れて行ってくれました。ぼうちょうした裁判は、せつとうや特しゅさぎ、薬物に関わる罪を犯した刑事事件でした。裁判のやりとりの中で印象的だったのは、証人として出廷した母親の言葉でした。息子が罪を犯して悲しい、くやしい、二度と同じことをしないでほしい、と涙を流しながら話していました。また、罪を犯した本人へのじん問では、本当はやりたくなかったけど言えなかった。家族に心配かけたくなって相談できなかった。という言葉も心に残っています。社会復帰したらどんな生活を送るかを尋ねられると、しっかり働いて被害者の方に対して、きちんと罪をつぐなっていくと話していました。本当に犯罪から立ち直れるかどうかはわかりませんが、家族がいて仕事もできる環境のようだったので、強い決意を持って立ち直ってほしいと思いました。

罪を犯すということは、やってはいけないことや取り返しのつかないことをすることだと思います。それによって友達や家族にめいわくをかけ、悲しい思いをさせてしまいます。少し前の出来事で、友達と学校から帰るとちゅう、友達が近所の家置いてある石をふざけて割って遊び出したことがありました。その時はぼくもおもしろくて笑いながら見ていましたが、何となく悪いことをしている感じもありました。でもその場では何も言うことができず、やめることができませんでした。そしてそのまま家に帰ってきてしまいました。ちょっとくらいだからだいじょうぶだろうという気持ちもあったと思います。後日、石の持ち主の方から学校に連絡があり、

みんなで謝りに行きました。持ち主の方は、「ただの石に見えるかもしれないけど、大事な宝物なんだよ、自分の宝物を壊されたらどんな気持ちになるか考えてね。」と今回のことは許してくれました。家族にもこのことを話し、母さんも謝りに行きました。その時の母さんは、怒っていたのと悲しくて情けない気持ちだったそうです。ふざけて軽い気持ちでやっていたことが、人の心をきずつけて、たくさんの人にめいわくをかけ、悲しい思いをさせてしまったと気付き、とても後かいしました。そして、悪いと思ったことは絶対にやらず、やっている人がいたら注意してやめさせる勇氣を持たないといけないと思いました。

犯罪のない社会にするために、ぼくにできることを考えました。一つ目は、うそをつかないということです。例えば、学校の道具をこわしてしまったら、正直に先生に報告するということです。わざとやったわけでもなく、かくさずに言わなければならないと思います。二つ目は、人のせいにしないということです。例えば、友達とサッカーをしていて、ボールが花だんの方にとんでしまい花が折れてしまった時、自分ではないと人のせいにしてはいけないということです。みんなで遊んでいた時に起きたことは、誰かのせいではなく、自分の責任だと思います。三つ目は、勇氣を持つということです。自分では悪いことだと思いながら、注意できずにやめさせられないのは、いっしょに悪いことをしているのと同じだと思います。また、良くないことに誘われても絶対にやらない強い意志をもたなければならないと思います。やめさせる勇氣と断る勇氣を持ちたいと思います。そして、これらを守りながら、多くの友達をつくることも大切だと思います。友達がたくさんいれば、なやんだり迷ったりした時に相談し合うことができ、協力して解決できると思うからです。悪いことややってはいけないことをお互いに注意し合える友達を増やしていきたいと思います。



法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催

第74回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

あなたのすてき

広島県・広島市立井口明神小学校・五年

杉山 葉絆

この作文を書くことが決まった時、私はどうすれば社会が明るくなるのだろうか考えました。幸せなことに、私の身近な所に犯罪とよばれることは起きていません。でも、犯罪というものはとてもつらくて、とても悲しいということは分かります。では、どうすればその犯罪を防ぐことができるのか考えてみました。しかし、小学五年生の私には大きなことはできないと思いました。私にできることは、毎日の小さなことに取り組むことだと思います。小さなこととは、自分がされてうれしいことをすること、自分がされていやなことをしないことだと考えました。

私のクラスでは、ほめカードを帰りの会に書いています。ほめカードとは、友達をほめるカードのことです。毎日一緒に過ごす友達に目をむけてカードを書くことは、書く方も気持ちがよいです。自分が気がついていなかったことを友達や先生に見つけてもらえることもあります。そんな時は、とてもうれしい気持ちになりました。人に自分の良いところを見つけてもらえる喜び、自分がこれまで気がついてなかった良いところを新たに知れる喜び、ほめカードをもらうたびに心の中が温かくなって、自分が自分で良かったと思えます。人のいやなところをみるのではなく、良いところに目をむける習かんは、人も自分の心も豊かにしてくれると思いました。また、自分の字で書いてくれることも心により伝わると 생각합니다。インターネットなど便利なことはたくさんあるけれど手書きのカードだと、もっと書き手の気持ちが伝わってくるように、わたしは感じました。

悲しいこと、苦しいこと、つらいこと、たくさんあっても誰かが自分をほめて、みとめてくれていると思えることは自信につながります。ほめカ

ードは、そんな自信を私にくれます。大人の世界でも犯罪は、心がさみしい人が起こすものではないでしょうか。心が温かくなる体験が犯罪をへらして社会が明るくなることにつながると私は考えました。道ばたに咲いたお花がきれいだと思えるような人がふえれば、きっと社会は変わると私は思います。ほめることも、きれいに咲いたお花をみることも、私の心が温かくなるスイッチです。そう思ったので、この前緑のぼ金をしました。ぼ金をしてマリーゴールドの種子をもらったので、きれいに咲かせたいと思います。私と家族の誰かの、心が温かくなるように、お世話してきれいなお花を咲かせたいです。

あなたのこんなところがすてき、すごいね、大好き、わたしができることは、一つ一つの「ほめ」を伝えていくことだと思います。

あなたの、こんなこと、すてきだよ！



明るい社会の一員になれるように



山口県・山口大学教育学部附属光小学校・五年
松前 愛梨

「刑務所の作業品販売会に行ってみない？」地域の情報紙を見ながら、母が言った。その時私は初めて作業品販売会のことを知った。刑務所の品物？ ちょっとこわい……。私はすぐに「行く。」とは言えなかった。

私は昨年、「社会を明るくする運動」の作文を書くことをきっかけに、罪を犯してしまった人を支え、受け入れられる社会について考えた。それにも関わらず、まだ私の中に偏見の気持ちが残っていたことにショックを受けた。

なぜ、こわいと思ってしまうのだろう。受刑者が作った物に対する抵抗もあったが、どのような物がどのように作られているのか分からないから、というのが一番の理由だった。知らないから、偏見にとらわれているのかもしれない。だから私は、販売会に行って、実際に自分の目で見て、刑務所の作業品について知ることにした。

どんな物があるのだろうか、私は緊張しながらゆっくりと会場へ足をふみ入れた。そこには家具や布製品、伝統工芸品や折り紙、ガラスペン……。多種多様な品物が並べられていておどろいた。ていねいにきれいに作られていて、思わず手に取ってしまうほどだったのだ。だから、いつの間にかこわさや不安はなくなっていて、妹のために折り紙とぬり絵を買った。「知る」ということは大切なことだとその時改めて分かった。

刑務所でこのような製品を作ることを刑務作業というそうだ。刑務作業は、受刑者が自分の役割や責任を自覚し、就労に必要な知識や技能を取得することにより、円かつな社会復帰をするために重要なことらしい。また、作業品の売り上げの一部は犯罪被害者支援団体の活動に助成されている。

だから、私たちが作業製品を購入することは、受刑者や犯罪被害者の支援につながっているのだ。

刑務作業をすることにより、受刑者が自分は社会に貢献していると実感できること。それが、受刑者の更生につながるというのは新たな発見だった。

私は、委員会や係活動などで、学校の中に自分の役割があるということがとても嬉しい。例えば、放送委員会でみんなを楽しませる放送や、時間を知らせる放送をした時、「頑張ってるね」、「今日も良かったよ」と声をかけてもらえると嬉しくなる。また、「いつもありがとう」と言われると、達成感があり、これからも頑張ろうと思うことができた。

私が自分の役割を果たし、周りの役に立ちたいと思えるのは、私を愛してくれる家族や何でも話せる友達、教え導いてくれる先生など、周りに大切な人がたくさんいるからだ。

罪を犯してしまった人は、人や社会とのつながりが少なく、自分は社会に必要とされていない、と感じているのだろう。だから私は、つながりがあると実感できる関係や、信頼しあえる関係をたくさん作ることで、犯罪に手を染める人も少なくなるのだと思う。

「刑務所の作業製品」と聞いて、こわいと思ってしまった私。そんな私にも、犯罪という道を選ぶ人を減らすために、何かできることはあるのだろうか。私は二つのことを考えた。

一つ目は、身近な人を大切にすることだ。困っている人に声をかけたり、友達や先生、地域の人に積極的にあいさつをしたりすることはもちろん、たくさんの人に感謝の気持ちを伝えたり、相手の良いところを見つけて伝えたりしたい。そうすることで、自分は大切な存在なのだと感じられる。だから私は、身近なところから、温かい気持ちをつなげていきたい。

二つ目は、「知る」ことだ。私は、刑務所の作業品がどんな物か知らずにこわがっていた。それと同じように、知らないから偏見をもってしまうこともあると思う。例えば罪を犯してしまった人は社会とのつながりが弱いということや、作業品を購入することが支援につながる。それらを皆が知ることで偏見や差別を少なくすることができるのではないかと思う。

私は、もう刑務所の作業品を購入することに抵抗はない。罪を犯した人

が社会復帰をすることを受け入れ、社会貢献することを認めて応援することは、その人が二度と犯罪に手を染めないようにするための一歩になると思う。そして、誰もが「自分は大切な存在だ」と自分に自信をもてるように、お互いを認め合い、優しい言葉をかけ合うこと。そうすることでみんなに笑顔を広げて、温かく支え合える社会にしていきたい。自分は社会を明るくする一員なのだと誰もが思える未来を目指して。



身近な人に声を掛けること

東京都・貞静学園中学校・三年
長崎 大嘉

昨年十一月十九日、ぼくの祖父は病気で亡くなりました。近所付き合いを大事にしていた祖父の通夜には、顔なじみの方がたくさん参列してくださいました。その中には、小学一年生くらいの小さな子の姿もありました。その子は祖父の棺に近寄っていき、一枚の紙をそっと入れていきました。それはひらがなでていねいに書かれたお手紙で、「おじちゃん、いつもみまもってくれてありがとう」と書いてありました。

祖父は、小学生の登校を見守るボランティアをしており、毎朝「おはよう」「いってらっしゃい」と声を掛けていました。そのため、最後のお礼を伝えようと、お母さんといっしょにわざわざ駆けつけてくれたのです。

自分を見守ってくれる人がいる。自分に声を掛けてくれる人がいる。何かあったときに話を聞いてくれる人がいる。ぼくは祖父を通して、大切なことに改めて気が付いたのです。

祖父が見守りボランティアを始めたきっかけは、地域の安全安心のためだったのはもちろんですが、それ以上に「恩返し」の気持ちが強かったからでした。

祖父が小学校に入学するときのことです。家が貧しく、その日食べる物があるのか分からない生活をしていました。そんな中、親がランドセルを用意してくれました。しかし、いざ登校してみると、自分のランドセルは他の子よりも見た目が悪く、明らかに粗悪なものだったのです。恥ずかしくて、帰りは隠すようにして持って帰りました。自分の親を、自分の生まれた環境を憎んだ最初の日が、この入学式だったそうです。

その後も、グローブが買えないから「部活には入らん」と強がる。弁当

を作ってもらえないから「お腹は空いとらん」とごまかす。一事が万事、貧しさゆえにみじめな思いを味わいました。

そのような生活が続き、卑屈な思いに押しつぶされて自暴自棄になりそのような自分を、ギリギリのところで止めてくれたのが、近所の人からの声掛けだったそうです。

「元気にやっとなるか」「ちゃんと食べとるか」「がんばるとるじゃないか」

この地域に住んでいて嫌な思いもたくさんした。だけど、助けてもらうこともあった。だから、今までもらった恩を返していきたい。自分を蔑む人がたくさんいる中で、足を踏み外さないで踏ん張れたのは、近所の人たちのあたたかい目と手と声だったのです。

祖父のように、つらいときや困ったときに声を掛けてもらったことで頑張れたという人はたくさんいると思います。ぼく自身も、周りの人たちに支えられて今まで頑張ってくることができました。

ぼくが小学一年生のときは、「ぼくなんていなくなってしまうといいんだ！」と泣いて、母を困らせていた時期でした。

ぼくは、会話のキャッチボールがうまくできず、人とのコミュニケーションがとりづらい状態でした。発音もできるし意味も分かるのに、他人と会話のやりとりができない。うまくできないのが分かっているから、人と話したくもない。今思い返してみても、本当に苦しい、もどかしい、どうしたらいいか分からないという思いでいっぱいでした。そして、自分を自分で否定してしまったのです。

ぼくはその後、「ことばときこえの教室」に二年間通いました。二年という時間をかけて自分の居場所を見つけ、自分の得意なことと苦手なことを知り、自分の言葉が伝わるうれしさを感じられるようになりました。

通級では、先生方が本当に親身に指導してくださいました。ぼくが話し出すのをゆっくり待ち、たどたどしい話をじっくり聞いてくれました。さらに、自分の思いを表現する方法として日記を勧めてくれました。水族館でペンギンを見たことや大好きなヒーローの映画を観たことなど、自分がしたことや思ったことを自由に書きました。ぼくが書いた文の横にびっしりと引かれた赤い波線と大きな花丸は、今もぼくが頑張る原点になっています。

家族もぼくのことを一番近くで見守ってくれました。そのおかげで、安

心感が生まれ、自分を認められるようになりました。

あれから六年経ち、現在ぼくは中学三年生となりました。中学校の最高学年として、後輩たちをまとめていくリーダーシップが求められています。しかし、ぼくは人前に立つのが苦手です。緊張もするし、うまくやれる自信也没有ありません。だからぼくは、後輩たちが困っていないか、一人になっていないかをよく見て、こまめに声を掛ける先輩になりたいと思っています。

社会を明るくするために必要なのは、人と人とのつながりです。祖父のように、まず、身近な人に声を掛けること。この作文は、ぼくの決意表明です。



「違い」をプラスに



東京都・港区立三田中学校・一年
丹羽 健

「なんでじろじろ見られているの？」小さな頃の僕は、よくそう思っていた。

僕は母親が日本人で、父親がタンザニア人だ。僕自身も肌が黒いが、父の肌の色はもっと黒いし、顔は完全に外国人だ。今は海外からの観光客もとても多いが、僕が幼い頃は外国人がずっと少なかった。そうした中で、僕と父が出かけると、すれ違う人たちに珍しそうに見られることが度々あった。今はあまり気にしなくなったが、当時の僕はそれが本当に嫌だった。今思えば、周りの人たちも悪意をもって見ていたわけではないと思うのだがどうしても嫌だった。

また、肌の色から変なあだ名を付けられたこともある。それも辛かった。全く話したこともない人に「お前、風呂に入ってる？真っ黒だよ。」と言われ、たまらなく腹立たしく悲しい気持ちになったこともある。もちろん多くの方は、そんなことを言わないが、どこへ行っても自分を傷つける言葉を投げつけてくる人に出会い、その度に怒りや悲しみがこみ上げた。それでも、学校に行くことが嫌だとは思わなかった。なぜだろう。思い返してみると、周りには僕の心を理解し、支えてくれる人たちがいたのだ。

母は、いつでも、どんな話でも一生懸命に聞いてくれた。だれよりも話やすい存在だ。そして、僕に読ませたい本をさり気なく与えてくれるのだ。そこから多くを学んだ。また、「まずは自分で考え、わからなかったら、誰かに助言をしてもらいなさい。」とも教えてくれた。父は周りの目を気にすることなく、気持ちを切り換えながら明るく、自信をもって生きている。そうした親の元で育ったことで、後ろ向きにならずにすんだのだろう。

友達はこんなことを言って勇気づけてくれた。「人は何かが違うと興味をもって、接してくる。でも、一人一人違うことが当たり前なんだから、気にすることなんてないんだよ。」と。

今、外国人による犯罪が増えている。僕自身の経験から、差別や偏見による孤独感や疎外感を味わう外国人も少なくないと思う。仕事に就きにくかったり、自分たちはマイノリティーという意識をもたざるを得なかったりする環境も影響しているかも知れない。追いつめられた感情が投げやりな行動へと繋がってしまうこともあるのではないかと想像する。外見や、育った環境による価値観、また国籍などの違いをどう乗り越えたらよいのだろうかと考えてみた。

まずは「人は一人一人違って当たり前」という認識をもって「違い」をプラスに捉えるための行動を起こすことが大切だと思う。そのために、多くの「交流」をしてみてもうどうだろう。一緒にスポーツをする、食事をする、音楽を楽しむ、話し合う、遊ぶ…。そのふれあいの中で、得意なこと、考え方の違いを尊重し合えたら、違いで生まれる偏見は、個性を認め合うことに変わっていくのではないか。そこに親しみや敬意が生まれ、さらに、相手をもっと知りたい、相手からもっと学びたいという気持ちも生まれてくるかと思う。「独りではないよ」というメッセージを受け取れたら、社会の中で犯罪に走る人はきっと減っていくと思える。

また、同情や同調ではなく、「相手の立場に立って考える」ことも、他の人との違いを表面的ではなく、いろいろな方向から理解するうえで大切なことだと母からもらった本で学んだ。

ここでなぜそうしたのか、なぜそう考えたのか、どんな言葉や態度が相手を苦しめているのかを相手の身になって想像する寄り添いがあれば、違いで苦しんでいる人の心はずっと軽くなるはずだ。

友達の一言で救われた僕。だからわかることもある。辛いこと、悔しいこと、悲しいことがあっても、たとえ、状況は変わらなくても、そばに、自分の気持ちを考えて寄り添ってくれる人がいれば、人は投げやりにならない。「明るい社会」とは、「違い」で排除しない社会、わかろうと寄り添ってくれる人がいる社会なのだと思う。「独りではないよ」互いが、そんな気持ちを伝え合えたら、社会はもっと温かく、明るくなっていくだろう。



法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催

第74回“社会を明るくする運動”作文コンテスト



「特別」ではない



富山県・南砺市立平中学校・一年

坂本 桜香

私には、仲のよい幼なじみがいる。

彼女とは保育園も小学校も、ずっと一緒だった。ただ、今は違う学校に通っている。私は地元の公立校へ、彼女は遠くの学校へ。たまに会うと、私たちの方へ駆け寄って来てくれる。そんな彼女は、明るくていつも笑顔だ。同級生は八人しかいない学年だったが、仲良し八人組の中での、ムードメーカーだった。彼女が笑うと、みんな笑顔になった。ダンスが好きで上手な彼女が踊ってくれると、みんな釘付けになったものだった。

小学校に入学すると、彼女は特別支援学級へと通い出した。私たちはそこで初めて、彼女と私たちが少し違うのだと思い知らされた気がした。先生たちは彼女のことを「特別」だと言った。

「彼女はいい。でも、皆さんは違います」

何度、そう言われたことだろう。しかし、私たちの彼女への接し方は変わらなかったように思う。特別扱いはしない。いやする必要がない。みんなと同じように接することに何の問題もありはしない。相談したわけではなかったが、そうするのが当たり前だと思っていた。なぜなら、彼女だけが違うわけではないからだ。

私たちには誰にでも、苦手なこと、不得意なことはある。そして、それは当たり前のことだ。もちろん私にだって苦手なことは山ほどある。たまたま彼女には苦手なことが多かっただけだ。それだけだったのだ。できないことは、できる周りの私たちが補えばいいし、みんなができるように工夫すればよい。もちろん、私たちが補うのも工夫するのも、彼女が特別だからではない。それが彼女ではなくても、当然のことなのだ。だから、私

私たちは今までどおり大切な一人の友達として、彼女に接してきた。その姿勢はこれまでもこれからもずっと変わらない。

果たして、私たちが選んだ選択が正しかったのか、私たちのしてきたことは彼女にとってよかったのか、それは分からない。しかし、私たちは全く後悔をしていない。少し苦手なことが多い、ただそれだけだからだ。「人より時間がかかる」ことや「苦手なことが多いこと」は何かを区別する理由にはならないし、友達ではなくなる理由にはならない。

小学校の卒業が近づいたころ、私たちは合唱の練習を始めた。彼女は流暢に話すことはできない。だから、音程やリズムをつけて歌うことは、彼女にとってなおさら難しかっただろう。それでも、彼女は何度も何度も家で練習し、音楽の授業の度に明るい笑顔で練習の成果を私たちに披露してくれた。元気よく歌ってくれた。私たちも、もっと彼女が歌いやすいように、リードできるようにと、より練習に熱を入れた。

卒業式当日、彼女は練習の成果を精一杯発揮した。堂々と元気よく、私たちと共に卒業の歌を歌い上げた。彼女は苦手なことでも一生懸命取り組んだ、だからこそ私たちもその気持ちに応えたいと思った。彼女と共に学校生活を送る中で、悩むことも少なからずあったけれど、彼女のおかげで私たちは、多くの体験を共有して強い絆で結ばれた仲間となれたのではないかと思う。これは後から聞いた話だが、その日一番感動していたのは彼女の両親だったらしい。

大切なのは特別だと思わないことではないか。「障害」があるから「障がい者」なのではない。「特別」だと思ふ心が、共に生きることへの「障害」となる。だれでも等しく唯一無二の人間であり、同じ社会を生きていく仲間である。

私たちにとって彼女は、ちょっと苦手なことが多いだけのかげがえのない友達なのだ。私たちはそのことをこれまでの生活で感じさせてもらった。彼女を一人の大切な友達として対等に接することで、彼女からしか得られない、大切なものを得られたのではないかと思う。

私たちはこれからも生きていく。その中で、どんな人とでも、互いにできないことは補い合える生き方をしていきたい。お互いを理解しようとし合い、みんなが幸せに、そして、笑顔で生活できる社会をつくり上げていきたい。



私と家族



東京都・中野区立江古田小学校・六年
高本 理冴

ゾッとする心苦しいニュースや悲しいニュースを見たり聞いたりして、いつも思うのは非行に走ったり罪を犯した人は、どのような環境で生きてきたのだろうかということです。同時にその人の家族や親しい人は、今どんな気持ちなのだろうかということです。私は、問題を起こしてしまった人の背景には、孤独感があるのではないかと思います。なぜなら、孤独感は、心の安定を崩し、相手への思いやりの気持ちや自分自身を大切にする気持ちさえも失ってしまうことがあるからです。

もし、私が思うように孤独感が非行や犯罪を起こす原因の一つになるのであれば、孤独感を感じないようにすればいいと思います。そのために必要なのは、誰かと繋がり安心できる環境の中で生活することだと思います。現在は、デジタル化が急速に進み、リモートなどの普及により対面で会うことなく物事が進み、人間関係が今まで以上に希薄になってきているのではないかと思います。地域の方との関係も少なくなり、社会的サポートも十分に得られず、より孤独感を感じる人が増えている可能性があるかもしれません。そんな今だからこそ、一番身近な家族との関係が大切なのだと思います。日常生活の中で会話を通じて、理解しあい、どんな時でも助け合えるような人が周りにいてくれるだけで、安心して生活できると思うからです。

私は、産まれた時から引っ越しを繰り返しその度に転校をしてきました。小さい時の引っ越しは、学校が変わることが当たり前だと思っていたため、さみしい気持ちはあるけれどもあまり深くはなく、次の新しい学校にもすぐになじめていました。私にとっての引っ越しは、友達や先生と別れる寂

しさ、それ以上に今までいた場所や国、住んでいた家から離れてしまうことの方に悲しみを感じていました。そして、四年生の冬に引っ越しすることになった時もすぐに新しい学校に慣れることができるだろうと思っていました。しかし、小さい時に比べて精神的に成長していて友達との関係が深かったため、実際に新しい学校へ行ってみると今までに感じたことのない疎外感に戸惑いました。今まで当たり前のように話して遊んでいた友達の存在の大きさを痛感し、その友達はもう今までのように会えないと思うととても悲しくなりました。そして、前の学校の友達のことを思い出せば思い出すほど、新しい学校での孤独感を感じました。家では、学校で我慢していた分、声をあげてたくさん泣いていました。そんな様子を見ていた母は、いつも私が落ち着くまで色々な話をしてくれたり、なぐさめてくれたり、はげまし続けてくれました。「理冴なら、大丈夫。焦らないよ。」とやさしく側にいてくれました。私は母の存在とたくさんの言葉にいつの間にか勇気と自信が出てきて、「明日も頑張ってみよう。」と思うことができ、自然と新しい学校にも慣れていくことができました。この経験を通じて私は、家族はどんな時も自分の味方であり見守ってくれて、支えてくれるかけがえのない存在であると改めて感じました。また、家族がいるところは安心して生活することができる居場所であることに気付きました。

非行に走ったり犯罪を犯した人に、もし寄りそってくれる家族や身近な人、また安心して生きていける場所があったとしたら、事件を起こすことはなく結果として、悲しい出来事が減るのではないかと思います。大切な家族や身近な人が近くにいることで、自分自身をも大切にし、相手のことを考えて行動できるようになるからです。家族や身近な人の存在によって、孤独感を感じる人が少なくなる社会になれば非行や犯罪がなくなると思います。



法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催

第74回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

心ってどこにある？伝える大切さ

長野県・箕輪町立箕輪東小学校・六年

山崎 義心

僕は、お寺に生まれた。周りからは、「お寺を継ぐ跡取り息子」という見方をされ「将来何になりたいですか？」と聞かれたらどう答えたらいいか分からなかった。いつの時代からか「坊主丸もうけ」という言葉が生まれ僕はお寺の子というだけで、「檀家の金で買ったの？」「お金があつていいね」「賽銭箱のお金持ってきてよ」と言われ嫌な思いをした事がある。世間からお寺はこういう見方をされているのかと思った。そんな時、母が「お寺の子でごめんね」

と言った。母は、一般家庭からお寺へ嫁ぎ、家庭と寺庭の違いに苦労し僕が物心ついた頃には毎晩お風呂で泣いていた。

「嫌な事や涙は、その日の内に全部シャワーで流しちゃうの」
と言っていた。親族の集まりでは、おばあちゃんがいつも母を指差し
「この人は一般家庭出身だからね。」

と笑っていた。僕は、いじめや差別ではないかと思った。しかし、母はどんな時も笑っていた。「笑う門には福来たるだよ」と。

人は、色々な感情や気持ちを持つ。心があるからだ。でも、心ってどこにあるのだろう。頭の中？体のどこ？

そんな時、母の声が出なくなった。病名は「心因性失声症」いつ声が出るか分からない。電話に出られない。会話ができない。来寺されても話にならない。そんな母を見て僕はどうしたらいいのか分からず毎日全力でお手伝いをした。月日は流れ、こんな日常に慣れて来た頃、朝、母が

「おはよう」

と言って僕の部屋に入って来た。びっくりしたのと嬉しい気持ちがごちゃ混ぜになり

「声出てるね、良かった。」

と僕の方が泣きそうになりながら声を振り絞って伝えた。母には過度なストレスがたまっていたのだ。いつも笑っているから誰も気づかなかった。

世の中には、日々大きないじめや目には見えない小さいいじめ、差別や偏見が転がっている。そして、それを抱え込み、誰にも話せずにいる人が沢山いると思う。子供だけでなく大人もだ。悲しい気持ちになり、身体に影響を及ぼしたり、鬱病になったり、社会を遮断したり、自死する人もいる。決して弱いのではなく、話を聞いてあげる人や場が少ないのも一つの要因だと思う。

母は、「お寺が一つの心の拠り所となり、色々な人の苦しみや悲しみをそっと聞いてあげ元気付けられる、そんな場所でありたい」と、婦人部の人達と寺カフェを始めた。

メニューは、寄付してくれる野菜などの食材で決める。送迎もある。みんなの協力で成り立っているカフェだ。会話は色々だが、みんな来た時よりもイキイキとした顔で帰って行く。

足が曲がらないと言っていたおばあちゃんが帰りには足を曲げて段差を上がっているのだ。人が人に与える力はすごい。一人暮らしのおじいちゃんは

「みんなで食べると沢山食べれる、感謝だ。」
と言ってくれた。

僕は、今まで母の話を聞いてあげられずにいた事を後悔している。だから今、カフェに来たお年寄りの話を一生懸命聞いている。お寺に生まれてうんざりだと思っていたが、身近に社会に繋がる環境があり「ありがとう、元気になった」と帰っていく姿を見て僕にも出来る事があったのだと思った。

落ち込んだり、不安になったり、そんな時は楽しい時間や支えてくれる人が糧になると思う。

皆さんは無理をし過ぎていませんか？日々感謝の気持ちを伝えていきますか？ありがとうと言えていますか？僕は、真っ先に母へそして見守ってくれている地域の方へありがとうを伝えました。心の隅にお互いに感謝する気持ちを置き、ありがとうを心がける生活をしていけたら明るい社会になるのではないかと思います。



みんなに安心できて温かい居場所を

三重県・津市立西が丘小学校・六年
栗田 美怜

私は犯罪や非行を実際に見たことはない。テレビでは見た事はあるが私には関係のない世界だと思っていた。しかし、授業で「社会を明るくするためにはどうすれば良いのか」という問いの答えを出すために、私たちに関係することを調べてみた。そうすると同い年ぐらいの子どもが犯罪や非行を起こしていたり、私たちが住んでいる場所でも起こしていたりした。これまでは、私には関係のない世界だと思っていた。けれどそうではなく、道で何気なくすれ違った人が、もしかするとテレビで映っているような犯罪や非行を起こした事があるかもしれないということを知った。さらに調べてみると、犯罪や非行を起こした事がある小中学生の中で、小学六年生が一番多かった。私たちと同い年だ。私は帰り道に、「なぜ犯罪や非行を起こしてしまうのか」について詳しく考えた。そして私は、「温かく安心できる居場所」がないといけないという答えにたどり着いた。

私にも経験がある。私が学校を転校した時に、一時期学校にうまく馴染めなかった。それに私に嫌なことを言ってくる子がいた。私はその当時、思っていた事がある。「学校には私にとっての温かい居場所がない」と。いろんな人に相談した。お母さん、スクールカウンセラー、先生。全員私が悩んでいることは真剣に聞いてくれた。しかし、私が求めている居場所を作ることは難しかった。そのうちに、私は学校を休みがちになった。休んでいる間は、気をまぎらわすために塗り絵などをしていた。当時のことを思い出し、私は気をまぎらわすために塗り絵をしていたけれど、犯罪や非行を起こす人も、苦しい状況の中で何とかして気をまぎらわすために、万引きなどをしてしまったのではないかと思った。学校でいじめを受けて

いたり、家で虐待を受けていたりして、自分の安心できて温かい幸せな居場所がなかったのではないか。誰かに相談しても良い答えが返ってこなかったり、そもそも相談できる人がいなかったりしたのではないか。そうすると気をまぎらわすためだったり、ストレスを発散するためだったりして、犯罪や非行を起こしてしまうのではと考えたのだ。

他の人の意見も聞きたくて、家に帰ってお母さんに聞いてみた。お母さんは「自分が幸せでない時に、すごく幸せそうな人を見てなんだか悲しくなったり悔しくなったり……。そんな気持ちから、犯罪や非行を起こしてしまうのではないか」と言っていた。私もそう思った。

このことを踏まえて、もう一度私とは関係のない世界だと思っていた犯罪や非行のニュースを見た。そうすると、犯罪を起こした人の近くに住んでいた人がインタビューを受けていた。その人たちはみんな「昔はすごくいい子でしたよ」「すごく優しそうで、犯罪を起こすなんて考えられないような子でした」と言っていた。犯罪や非行を起こしてしまう人の大体は、すごく良い子で犯罪を起こすなんて考えられない子だったのではと考えた。でも本当は悪いことだっけしたいに決まっている。私だってたまに悪いことをしたくなる。それにずっと良い子のふりをしていると疲れてしまう。私も家にお客さんが来ている時は、良い子と思ってもらいたくて良い子のふりをする。そうするとお客さんが帰った後にすごく疲れる。これと同じなのではないだろうか。これをずっとやっていると、何かに逃げたくなって犯罪や非行を起こしてしまう。良い子のふりを続ける原因は、自分は誰にも認められないと感じ、誰かに認められたいと思うから良い子のふりをするのではないだろうか。つまり「安心できて温かい居場所」がなくて犯罪や非行に逃げてしまうのだと私は思う。

私が学校に行けず、苦しかった時に一人の女の子が声をかけてきてくれた。声をかけてくれたとき本当にうれしかった。何かに救われた気がした。最初は上手に話すことができず、少しきよりがあったように思うけれど、その子はちがう子のところに行くことなくそばにいてくれた。その内だんだん仲良くなり、その子の友達とも仲良くなれた。そして私が転校するまで、ずっと友達でいてくれた。お別れ会も開いてくれて、最後の日まで一緒に遊んだ。彼女のおかげで、学校に私の「温かく安心できる居場所」ができたのだ。

私は人のいろんな悩みを完璧に解決することはできない。しかし、なぜその子が犯罪や非行を起こしてしまうのか、その子が起こさないようにするにはどうすれば良いのかは考える事ができる。そして、実行することもできる。学校でひとりぼっちでいる子に、勇気を出して声をかけてみることで、その子の大切な命を救う事だってできる。私は、「みんなの安心できる温かい居場所」を一つでも多く作る。この「社会を明るくする作文」を書いて強く誓った。



小さな声かけ、大きなつながり



北海道・札幌市立篠路西中学校・三年

近藤 舞桜

私の母は色々な仕事をしている。中でも長いのは深夜のコンビニの仕事だ。コンビニが犯罪や事件に巻き込まれる事例は少なくない。正直、あの日の出来事がなければこんな仕事は早く辞めてほしいとずっと思っていただろう。

ある日、母と歩いていると向かい側から若者四人組が騒ぎながら歩いてきた。タトゥーが入った腕を「見せびらかせて」歩いている姿に私は少し怖い気持ちと嫌悪感を持った。私が「違う道を通ろう」と母に言うと若者の一人がこちらに向かって「こんにちはー！」と声をかけてきた。私は驚いて「えっ？」と横を向くと隣の母も笑顔で手を振っている。

四人はいそいそと私達のところまでやってきて、母と話し始めた。「仕事は？」「辞めちゃった！」「また辞めたの！？じゃあ次は違う事やってみな！」「俺はまだ続いてるよ！この前出張に行ったんだ！」「偉いじゃん！そのまま頑張るんだよ！」若者たちは次から次へと我先にと自分の話をする。まるで母親に学校の話をする子どものようだ。母に小言を言われても四人は笑いながら楽しそうに話しを続ける。

そんな会話に圧倒されていると「お兄さん」が「びっくりしたよね？ごめんね！学校頑張ってるね」と声をかけてくれた。「は、はい！」と気を抜けた返事をする。「またね」と笑いながら彼らはタトゥーの入った腕を高く上げて大きく振った。ぶんぶんと振るその腕のタトゥーはもう「見せびらかせている」ようには見えなかった。「今の人たち誰？」と母に慌てて聞くと「コンビニのお客さんだよ」と答えてあははと笑った。「全然怖い人じゃなかった？」と言われ、さっきまで「タトゥーを見せびらかせなが

ら歩いている人」だったのが、ほんの少し関わりを持ったことで、いつの間にか「タトゥーが入ったお兄さん」に自分の中で変わっていた事に気がついた。

「うん、感じの良い人だね」と母に返事をした自分に何かモヤモヤしたものを感じた。

見た目だけでいえば「関わりたくない人」だと思ったのに、挨拶をただでこんなにも簡単に「感じの良い人」に変わってしまった。人に対するイメージとはこんな単純な事で変化するものなのだろうか。そんな私を見て、母は「関わってみないとどんな人かわからないよね」と話しかけてきた。

母がコンビニを辞めない理由、それは「たくさんの人と関わりたい」からだそうだ。お客さんと接客を通じて挨拶や会話をすることで「顔見知り」になれば自然とお客さんと新たな関係が出来上がる。そんな小さな行動が、地域の安全や心の拠り所につながるのだと母は考えているのだ。なぜそのような考えになるのか尋ねると「誰かに自分の存在を知って貰えたり、気にかけて貰えたりしたらほんの少しだけ嬉しくない？」と、母は微笑んだ。

幼い頃に母子家庭で育った母はいつもひとりぼっちだったらしい。電気の紐に手が届かず、母親が帰宅するまで真っ暗な家の中で一人で過ごすことも少なくなかった。真っ暗な部屋が怖くていつも日が暮れても一人で外にいたのだという。そしていつしか学校が終わってもまっすぐ家には帰らなくなったと話してくれた。

そんな幼い母を気にかけてくれていたのが祖母や祖母の友達、地域のお店の人や習い事の先生たちだったそうだ。私は「可哀想だな」と感じた。しかし、「ママは地域の人に育ててもらったんだよ」という母の横顔は私の考えとは真逆でとても嬉しそうだった。

「社会を明るくする」ということは、誰も孤独を感じない社会を目指すことなのではないだろうか。実際にお兄さんたちと母の関わりを見てそう強く感じた。「誰かが自分を気にかけて大事に思ってくれている」「一人じゃない」その思いが犯罪の抑止力になるのではないだろうか。

人は弱い。

自分ではどうしようもできない大きな壁にぶつかった時、自分ひとりでもがく力をよりも「大丈夫だよ」と言葉をかけてくれる人が一人でも多く

いる環境の方が必要なのだ。

こんな小さな地域の小さなコンビニから、母の関わりをもったお客さんたちの笑顔がたくさん生まれているのだと思うとなんだか母を誇らしい気持ちになった。

今日も大好きな仕事へ向かう母の背中に、小さく「頑張れ」と呟いた。



法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催

第74回“社会を明るくする運動”作文コンテスト



繋がり、理解し、支え合う



沖縄県・浦添市立浦添中学校・三年

崎原 未来

今年の五月に私が通っている学校では、非行防止や犯罪被害防止について学ぶ安全支援授業が行われた。その際、私と同年代の子が薬物乱用や、サイバー犯罪などを行っているということを知った。この事実を聞いた私は、「えっ、私と同じ年でも罪を犯してる人がいるんだ」と衝撃を受け、家に帰り安全支援授業で学んだことを母に話した。すると母は、私が幼い頃までしていた仕事について話してくれた。私の母は昔、青少年健全育成活動に関する仕事をしていたそうだ。母は仕事を通して、少年補導活動や夜間パトロールを行ったり、悩みを抱えている青少年の相談を受けたりしていたそうだ。また、窃盗、シンナーなどの薬物乱用、家出、恐喝をした様々な少年、少女と出会ってきたそうだ。私は犯罪や非行はニュースや新聞でしか見たことがなかったため、自分とはあまり関係のないものだと思っていた。しかし、まさか自分の母が、非行を行った自分と同世代の子と深く関わっていたことに、すごく驚いた。母の話聞く中で、私は、「なぜ非行や犯罪なんてするのだろうか？」という疑問が浮かび、母に問いかけてみた。すると母は、

「この子たちの中には、育ってきた環境や様々な気持ちが複雑に絡み合っていて、孤独や劣等感を抱いているんじゃないかな？そんな時に同じような境遇の人と出会い、社会に反発することで自分の居場所や存在価値を見つけ出そうとしているのかもしれないね。」

と言った。母の言葉は、非行をした子供達の犯した罪だけでなく、その人の抱えている背景を読み取り、その上で相手に寄り添い、全てを包み込む大きな愛や温かさに溢れていた。私は、母の言葉を聞いて、今までの考え

が覆された。私は今まで、犯罪や非行をする人は、被害者やその周りの人を傷つけたり、迷惑をかけたりする「悪い人」という強いイメージしかなかった。しかし、犯罪や非行をする人の中にも、目に見えないだけで、その人の中で様々な葛藤や辛く、苦しい思いをしている人もいるのかもしれない。その思いを相談したり、受け止めてくれたりする存在が居なくて、さらに生きづらさを感じているのかもしれない。犯罪や非行をする人だけが悪いのではなく、困っている人や助けを求めている人のSOSに気づかず、手を差し伸べることができない世の中にも少なからず原因があるのではないかと感じた。もちろん、犯してしまった罪や過ちは決して許されるものではない。しかし、非行や罪を犯してしまった人の中にも、本気で更生しようとする人がいるのではないか。だが、更生しようとする機会に対して世間の目は厳しく、受け入れられる環境が少ないように感じる。だからこそ私は、更生しようとしている人たちが、二度と同じような過ちを犯さないように支えられる世の中に変えていきたいと考える。ふとした出来事がきっかけとなり、非行や犯罪を犯してしまう可能性は、誰にでもある。そのため、非行や犯罪は自分に関係ないこととして捉えるのではなく、日頃から周りの人と信頼関係を築くことが大切だと思う。なぜなら、信頼関係を築くことでお互いに心の拠り所ができ、心の傷が癒されたり、救われたりすることがあるからだ。そうすることで、非行や犯罪を犯す人は減少していくのではないかと思う。

また、一度非行や犯罪を犯してしまった人がいても、犯してしまった過去の過ちは取り消すことはできないが、出会う人との繋がりによって未来は変えていくことができる。だから、私の周りに困っている人がいたら、自分から助けたり、心に寄り添ったりして、できることから一つずつ取り組んでいきたい。

また、将来は母のように困っている人を助けたり、支援したりするような仕事に就きたい。そして、一人一人が手と手を取り合えるような明るい社会を作っていきたい。



明るい社会はだれもがたから物

埼玉県・吉川市立吉川小学校・三年
對馬 優

わたしに妹が生まれたときにお母さんが、
「ゆうちゃんもれいちゃんもママのたから物だよ。」
と言ってくれました。その時、わたしはとてもうれしくて、大切にされて
いるんだと感じました。生まれてよかったと思いました。

しばらくして、テレビのニュースを見ていた時、お母さんにしつ問しま
した。

「ニュースに出るようなわるい人も、だれかのたから物なのかな。」
お母さんは、

「きっとそうだと思うよ。家ぞくや友だち、ほかにもその人を大切に思う
人がいるんじゃないかな。」

と言いました。

わたしはわるいことをしてしまった人もだれかのたから物かもしれな
い、とは考えたこともありませんでした。

「だけど、わるいことをした人をたから物と思えるのかな。」
とわたしは言いました。わるいことをしたからその人からはなれていく人
もいるかもしれないと思ったからです。

「それはあるのかもしれないけど、おなかの中でそだったからにはどんな
人もみんなたから物なんだと思うよ。生まれてきたってことはおなかの中
で大事にされたってことだから。」

そう言われて、わたしは妹がお母さんのおなかの中にいた時のことを思い
出しました。お母さんはいつも体調がわるくて、気持ちわるくてはいてい
たり、ねていたりしてすごく大へんそうでした。でもおなかの中で妹のこ

とを大切にそだてていました。わたしの時も妹の時も、生むときとってもつらかったけどがんばったと言っていました。人が生まれることは大へんなことだと考えると、やっぱり生まれてきた人はみんなたから物なんだと思います。

生きている人は全いんだれかのたから物だから、やっぱりだれもがかがいしゃやひがいしゃになってはいけないと思います。みんながだれかのたから物だとそうぞうしたら、だれもがかいやな思いをすることはおこらないはずです。

何かわるいことをしてしまった人は、ひがいしゃの人もだれかの大切な人だということがそうぞうできないのもあるけれど、自分が本当に大事にされているのかわからない人、まわりに自分を大切に思っている人がいないと思っている人なんだと思います。もし本当にそうだったとしても、この先、大切な友だちができることもあるだろうし、自分を大事に思ってくれる人や自分にとってのたから物と思える人と出会うこともあるんじゃないかなと思います。そうなったときに、自分がしてしまったことが本当によくないことだったと気がつけるかもしれません。そう思うと、はんざいをしてしまってもやっぱりだれかの大切な一人、たから物なんだと思います。

だから、わたしの思う明るい社会とは、どんな人も自分が大切にされていると感じることができてまわりの人を大切にできる社会だと思います。

今わたしができることは、相手の気持ちを考える人になること、友だちや家ぞく、まわりの人を大切にしておさしくかかわること、そしてこれから出会う人たちを大切にすることだと思います。これからたくさんの人と出会い、その人たちを大切にしていきたいです。あなたはたから物なんだよ、とつたえていきたいです。そうすると明るい社会に一步近づくとおもいます。



声をかけてみよう

岡山県・浅口市立寄島小学校・五年

龍 一樹

今年の一月二十六日、金曜日。ぼくは、学校の帰りに境内でおじいさんに会いました。

「こんにちは。」

とぼくは、おじいさんにあいさつをしました。

「あれっ、ぼくの声が小さかったのかなあ。」

おじいさんは、あいさつを返してくれませんでした。

その時は、あまり気にしていなかったのですが、この後に起こる事けんにぼくが関係するなんて思ってもみませんでした。

ぼくの家は、お寺です。その日も、いつものように下校をして、お寺の境内にあるお地蔵さんに手を合わせて帰宅しようとした時にそのおじいさんに会いました。知らないおじいさんだったので特に気にかけることもなくその一日は、終わりました。

二日後、お寺に警察が来ました。なんとそのおじいさんは、さいせんどろぼうだったのです。今まで何度かひ害にあっていましたが、だれもさいせんどろぼうの顔を見た事はありませんでした。防はんカメラにぼくとそのおじいさんが映っていて、顔を合わせているのがぼくだという事が発覚したのでした。その事をお母さんから聞いた時に、ぼくは、

「なんでこんな大切なお金をどろぼうは、ぬすんだりするのだろう。」

とせつない気持ちになりました。もやもやとした気持ちが心に残ったままで、

「そのお金で、パンや牛乳を買うのかなあ。」

「お腹がすいていたら、しょうがないのかなあ。」

いろいろな考えてみましたが、やっぱり分かりませんでした。でも、一

つ思うことは、きっとさいせんどろぼうにも、悪いことをしているという後ろめたい気持ちがあって、ぼくにああいう態度を取ったのだと今は思っています。ぼくが、あいさつをすると、さいせんどろぼうは、顔を少し下にして、背を向けて無言で行ったからです。

お寺にはってあるポスターに、

「一隅を照らす」

という言葉が書かれてあります。天台宗の開祖で、最澄さんの言葉です。

「一人ひとりが自分のいる場所で、自分が光となり周りを照らしていくこと、私たちの本来の役目であり、それが積み重なることで世の中がつくれる」という意味です。つまり「自らが今いる場所で最善を尽くすことが、隣人や、世界を良くすることに通じる」ということです。

ぬすんだりする事は、決して良くないことです。ぼくにも分かります。そのおじいさんにも何か事情があったのかも知れませんが、何度も同じ過ちをくり返してしまうのは、病気なのかもしれません。警察の人も、何度も注意をしに行ってくれましたが、わかってくれませんでした。

しかし、その日から、さいせんどろぼうは来なくなりました。お母さんは、

「すごいね。ちゃんと、あいさつできるのは立派なことだよ。」

とほめてくれました。ぼくのあいさつがきっかけだとは思いませんが、ぼくができることは、これくらいの小さなことです。でも、何がきっかけで人の心を変えるか分かりません。

ぼくが体験したことを通して、「社会を明るくする」ためにできる事を考えると、小さな光でも、

「気にかけているよ。」

と相手を照らすように声がけをすることで、はん罪は少しでも減るのではないかと考えます。



だれかのためにできることを

熊本県・荒尾市立緑ヶ丘小学校・六年
跡部 唯吹

私たちは、体の大きさも顔も一人一人ちがいがあり、心の中で考えていることも人それぞれです。時には、落ちこんで元気が出なかったり、心の中がモヤモヤしたりすることがだれにでもあると思います。そんな時、助けになるのは周りの人の存在だと思います。だれかのために自分にできることをしていく。そうすることで、もっと豊かで明るい社会がつかれると私は考えています。

そう思うようになったのは、地域の見守り隊の方々の姿がきっかけでした。私たちが毎日学校に登校するときに、通学路には見守り隊の方がいて、私たちの登校の様子を温かく見守ってくださっています。授業で見守り隊の方々に質問をする機会がありました。そのときに私が、

「どうして毎日ボランティアをしているんですか。」
とたずねると、

「みんなが安全に登校できるように、元気に登校できるようにだよ。」
と答えてくださいました。私はその言葉を聞いて、「自分のことだけでなく、誰かのために行動することっていいな」と感じました。また、見守り隊の方々のように私たちが気付かないところで支えられていることは他にもたくさんあるのかもしれないと考えるようになりました。見守り隊の活動のように自分たちも誰かのためにできることをもっともってしていきたいと考えました。

それから私は、運営委員会の仲間と話し合っあいさつ運動を始めることにしました。「あいさつを通して、全校のみんなが元気に登校できるように」と考えたからです。場所は正門で行っています。初めのころは、緊

張と恥ずかしさで、なかなか大きな声が出せなくて、ぎこちないあいさつ運動でした。また、「あいさつ運動をこんなにがんばっているのに、元気なあいさつがなかなか返ってこないな」と自分たちの思いが届かないモヤモヤが心の中にありました。それでも、毎日続けていくと思いが届いていると感じる出来事も増えてきました。三年生の子が「おはようございます。」ととても元気で明るいあいさつをしてくれたのです。その三年生のあいさつをきっかけに、私たちは、さらにみんなが元気をもらえるような心に届くあいさつを続けていきました。次は、一年生が元気いっぱいの声で

「おはようございます。」

とにこにこ笑顔であいさつをしてくれました。そんなあいさつがどんどん広がりいろんな学年の人がすてきなあいさつをしてくれるようになりました。登校するときのみんなの雰囲気も変わってきて明るい声が飛び交う朝の時間になりつつあります。心の中の思いをあいさつで届け、それがみんなに伝わってきていることがとてもうれしいです。

見守り隊の姿を見て、自分にできることを続けたことで、それが学校のみんなに少しずつ伝わっていきました。それがもっともっと広がって、だれかの心を明るくすることにつながると思うと、私の胸まであたたかくなります。あいさつ運動以外にもできることは、もっともっとありそうです。世界平和を守る正義のヒーローにはなれないけれど、近くにいる周りのだれかのために考え行動していくことを私は続けていきます。



誰かのために変わったなら



神奈川県・横浜市立南高等学校附属中学校・二年

松尾 香音

人の人権が脅かされないように配慮する。それは最低限の思いやりだ。
誰かに人権を脅かされたときに、自分のことを守るために法律がある。
法律があるから一人一人の人権が守られる。法律を守ることは思いやりそのものだ。

犯罪者はその思いやりを忘れた者だ。罪を犯した人がSNSで誹謗中傷を受けたり、刑期を終えて釈放された人が職に就くことができずに困っていたりするのをニュースで何度か見てきたが、私は、一度思いやりを忘れた者が二度と人に思いやられないのは、彼らが受けるべき罰だと思っていた。あるニュースを聞くまでは。

刑務所で服役中の母親が、塀の外に残された子供のために、絆プログラムに参加するというニュースだ。プログラムの内容は、母親が絵本を読む声を録音し、それを子供に聞かせて間接的な読み聞かせをするというものだ。

私は母親達の読み聞かせに耳をすませてみた。

「それ なあに？」

「あかちゃんのおようふくよ」

「あたしがあかちゃんだったときの？」

「そうよこんなにちいちゃかったのよ」

緊張して少し強張った声だった。だが、彼女達が刑務所にいることを忘れてしまうくらい優しい声でもあった。普通の親子が会話しているように思えて、思わず、感動してしまった。何が私の心を揺さぶったのか。

彼女達は、インタビューの質問に対して自分の思いを出し切るまで丁寧

に答えていた。「自分は大切に思っていると子供に伝えたい。」「申し訳ない。信頼を取り戻したい。」そんな思いをもって、プログラムに自ら参加していたことが意外だった。私は、犯罪者も自ら変わろうとすることを、生まれて初めて知った。

また、母親達は、どんな感情を込めて読むのが良いかわからないとき、自分で考えたり仲間の考えを聞いたり、必死に答えを探していた。経験から答えを導き、考え、人生を振り返って罪を償うという更生の意もあるのだが、わが子のためを思って真剣に思いを届けようとする姿は、普通の優しい母親の姿にしか見えなかった。彼女達は自らの意志で、思いやりを忘れた犯罪者から、子供への愛溢れる母親に、変わることができるのだ。

私は、罪を犯した者に対して無意識に固定観念をもっていた。彼らの中にも変わろうとする者がいることを知らなかった。「信用できない」とレッテルを貼り、刑期を終えて釈放された人が自由に働く権利を脅かしてしまっていたかもしれない。

彼女達もまた人であり、私達と同じように人権を持っている。再び人を思いやるようになった者の人権は守られるべきだ。彼女達が社会で自由に生活できるように、私達は不要な固定観念を捨て存在を認める必要がある。互いへの思いやりが社会をより良くするのではないだろうか。その思いやりによって、一人一人の人権は守られる。



先入観を取り除いて

神奈川県・川崎市立宮崎中学校・三年
山西 佳苗

今から一年くらい前のある日、私は母のいところで、私のいところ叔父にあたる人の話を聞きました。その人は過去に罪を犯してしまいましたが、更生し、今は会社を経営している社長です。私は気になって、直接インタビューをすることにしました。

そのいところ叔父は、努（つとむ）さんといい、覚せい剤をして捕まったそうです。

まずはやってしまった理由を聞きました。

「自分は十代の頃、いわゆるヤンキーや不良の仲間、周りがやっているから、自分もやってみよう、と軽い気持ちでやった。」

と答えてくれました。さらに、不良の仲間になった背景を尋ねると、

「家庭が複雑だったとか、そういうのじゃなくて、ただ反抗期の延長のしすぎ。当時は親に迷惑かけてやろうと思っていたよ。親からは愛情をいっぱいもらっていたのにね。だから、今は、迷惑かけたなーとすごく思う。」私は拍子抜けしてしまいました。これまでニュースで見てきた人たちは、誰でもいいから殺したかった、などと変わった理由で犯罪をした人が多いように感じていたのに、こういう軽い気持ちでやる人もいるのだ、と感じたからです。

努さんが刑務所に入っていた期間は三年間。

「その期間はどんな時間になったのですか。」

と私が聞くと、

「その間は自分を見つめ直す時間になったよ。これからはもう犯罪をするのはやめて、やり直そうと思ったな。ここがチャンスと思って。」

「周りの捕まってしまった人も努さんのように考えている人は多かったのですか。」

「そうだね。刑務所には変な人もいっぱいいるけれど、人情味のある人が多かった。なんで罪を犯したの？と思うほど。みんな、それぞれ生活に困っているとか、理由があるんだろうな。」

そう言って教えてくれる努さんこそ、人情味があって、「なぜ犯罪をしたのか。」と思うような人でした。だから、周りがやっているから自分もやろう、というその一時の選択は、こんなにも犯罪とは一番無縁そうな人にも犯罪に手を染めさせてしまう重みがあるのだと知り、怖くなりました。

努さんは刑務所を出所した後、親の元で若いころやっていたという今の職種に就いたそうです。

最後に、私は一番気になっていたことを聞きました。それは、
「あの時こうすればよかった、こんな人がいてほしかったなどと思うことはありますか。」

という質問です。その答えは、

「特にないんだよね。当たり前だけど、法に反することはやってはいけないし、悪いことなんだけど、罪を犯してしまったから刑務所での時間があって、それのおかげで今の自分があるのかなと思う。だから、後悔じゃなくて、これから先の仕事のこととかを考えることが多いかな。」

「では、具体的に今は、そしてこの先はどうしようと考えているのですか。」

「今は、会社で六人の従業員を雇っているんだよね。みんな、信頼関係がないとついてきてくれないし、今の奥さんも、支えてくれているんだから、やっぱり人間関係は大事にしなければいけないと思った。人から大事にされる、人を大事にするっていう関係がさ。」

ああ、この人はもう二度と罪を犯すことはないだろう、と、この言葉を聞いて思いました。努さんのその意志は、決心は、きっと揺らがないだろう、と確信しました。その証拠に、私の目には、こぼれそうな涙が浮かんでいたのです。

努さんとのインタビューは、私に全く違う視点や世の中を教えてくれました。そのおかげで、私は学んだことが二つあります。

一つは、一つの選択の重さです。それがどんな気持ちでも、それを実行

してしまったら、もう取り返しはつかないのです。インタビューで、私は何度も「この人が犯罪をしたのは嘘なのではないか。」と思ってしまうほど、努さんは素敵なお人でした。でも、一度の軽率な気持ちによる決断が、更生できたからよかったものの、危うく努さんの未来を苦しめるところでした。

二つ目は、努さんがこうして優しい努さんでいられるのは、周りの人が「罪を犯した人」というレッテルだけで判断しなかったからだと思います。それこそが、更生した人との正しくて一番思いやりのある関わり方なはずです。それは、犯罪だけでなく、周りにいるような、少しやんちゃな子もきっとそうです。そのような方向に人が行ってしまうないように気をつけるべきなのは、私たちの選択する責任です。そして、その人たちの根の部分を見るのが、明るい社会への一歩だと思います。



法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催

第74回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

社会を平等に

和歌山県・九度山町立九度山中学校・二年

杉原 逢未

私の知り合いの女性に、病院で勤務の方がいます。彼女は、受付や会計を主に仕事とする医療事務員です。この夏、その方に会い、考えさせられるお話をうかがう事ができました。その話を聞いて私が思った事、感じた事、そして、これからどうすればいいのか、疑問に思った事を書きたいと思います。

ある病院で働く私の知り合いAさんは、一人の患者さんの事を気にかけています。六十代の男性で、身寄りのない方だそうです。もちろん、個人情報なので詳しくは話せないけれど、その患者さんは、以前、刑務所に入っていた事があり、出所してからその病院に通うようになりました。けれど、友達もいない土地で、病気になり、体だけではなく、心まで病んでしまったそうです。治療をし、楽にしてあげたいけれど、喜怒哀楽が激しく、診察するのも難しい日もありました。けれどAさんは、その男性のことをあきらめず、同じ高さにひざをついて座り、目を合わせて、話すようにしたようです。するとある日、ポツリポツリと思うことを話してくれるようになったとの事です。「自分は悪いことをした。刑務所に入り、きちんと償ったけれど、みんな冷たい。信用できない。」と悲しそうに言ったそうです。だから、しんどくて病院に来て、看護師さんや、お医者さんに、頼れなくて素直になれなかったようでした。Aさんは、「そんな事ありません。犯罪者でも、誰でも、ケガや病気は平等に、治す権利があります。そして、きちんと償ったのなら、自信を持って、医療を受ければいいじゃないですか。」と話し、検査や診察を進め、ついにお薬を持って家に帰らせることができたのです。そして数日後、具合がよくなってその男性から、

電話があり、「おかげ様でとてもよくなった。ありがとう。」と言ってくれたそうです。

Aさんは、この言葉が何よりもうれしく、長い間、この仕事を続けていると笑顔で話してくれました。そして私まで、うれしくなりました。

Aさんは、とてもがんばり屋で、時には、寝る時間もない程、仕事で忙しい人です。でも、疲労で、体調が悪く、ある日、倒れてしまったそうです。好きで仕事をしているから、苦ではなかったそうですが、その時も、うれしい事があった、と教えてくれました。

倒れても、病院で、座ってできる仕事をしていたら、あの男性が、お薬がなくなった、と来院されたそうです。体調がすぐれないAさんを見て、「どうしたんや。」と心配してくれ、持っていた、アメを渡し、「何の足しにもならないかも知れない。でも、あの時、助けてくれたから。」と笑って言ったそうです。ほとんど笑顔を見せない男性だったのに、Aさんに笑いかけてくれたのです。

私はAさんのこの話を聞き、犯罪はもちろん悪いし、してはいけない事だとは思いますが、その後の社会の対応も考えなくてはならないと思いました。

犯罪をしてしまっても、同じ人間であり、自分たちと同じように病気やケガを治療する権利、社会で生きていく権利はあります。色々な価値観や考え方はあるけれど、私はAさんのように、どんな時でも、どんな人にでも平等に接する大人になりたいと思いました。そして、そんな人が増えれば、犯罪自体も減るのではないかと思うのです。